

英語英米文学論集

第29号 2020

安田女子大学英語英米文学会

英 語 英 米 文 学 論 集

Journal of English Language and Literature

安田女子大学英語英米文学会

English Language and Literature Society,

Yasuda Women's University

目 次

「虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と 異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (13) ——語り直された物語, <i>Lay Your Sleeping Head</i> の意味すること——……	青 木 順 子	1
認知意味論——人間的自然の哲学 ……………	青 木 克 仁	25
日英バイリンガル記事における Theme 選択の差異…	三 宅 英 文	35
文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 2) ——名詞句からの外置化——……………	杉 山 正 二	55
著者紹介		
活動報告, 投稿規定		
学会会則		

「虚構世界」と「現実世界」：
小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (13)
—語り直された物語, *Lay Your Sleeping Head* の意味すること—

青 木 順 子

要 旨

マイケル・ナーヴァによるヘンリー・リオス・ミステリー・シリーズは、1986年に刊行された *The Little Death* から始まって、2001年の7作目の *Rag and Bone* で完結とされていたが、2016年に、*The Little Death* の書き換えとして *Lay Your Sleeping Head* が発行される。1986年の時点ではナーヴァができないと考えていた、ロマン・ノワールの虚構世界の語りを遮ることなく具体的な性描写の挿入と民族的な出自の強調をすることを、この改訂版では試みている。また、プロットも変更され、作家が過去に影響を受けた作品の影響をより明白に反映したものとしている。写実的な図柄の表紙から物語の中の「本棚の本」の変更にいたるまで、社会にも、読者にも、そして自分自身にも、作者は挑戦的な姿勢で改訂に臨んでいるといえよう。改訂版には、本の「虚構の真理性」を生きるために必要とした読者ナーヴァの人生と、その「虚構の真理性」を読者に与える自作品の永遠性に対する作家ナーヴァの覚悟が両方色濃く反映されている。

は じ め に

ヘンリー・リオス・シリーズは、1980年度後半、AIDS と同性愛が同一であるかのように世間から見なされた時代から2000年前半までの、20年以上にわたる米国を舞台に、メキシコ系米国人の同性愛者である弁護士ヘンリー・リオスを主人公と

し、ミステリー小説として高い評価を受けているシリーズ¹⁾である。1986年に刊行された一作目の *The Little Death* から、数年間隔で刊行され、2001年の7作目の *Rag and Bone* でシリーズは完結している。作者のマイケル・ナーヴァ (Michael Nava) [1954.]自身が、主人公と同じメキシコ系米国人の同性愛者の弁護士であり、本業のかたわらに小説を執筆している。最初の2作は、小さなゲイ小説専門の出版社から刊行され、一般にも高い評価を受けたため、3作目からは大手出版社から刊行される。3作目、4作目、そして5作目は、その年の最高ゲイ文学作品に与えられるラムダ・ブック賞の、ベストミステリー部門に選ばれている。このシリーズは、毎回、弁護士であるヘンリーが殺人事件の容疑者の弁護を担当し、事件の真相を突き止めていくという、一般のミステリーのエンターテインメント小説である一方、同性愛者をシリーズ全作の主要人物として必ず登場させるという点で徹底したゲイ文学といえる²⁾。

このヘンリー・リオス・シリーズは私自身が大いに感情移入をして入り込んだ物語でもある。全作がすでに発行されていた2011年2月にこのシリーズを初めて読んだ私は物語に入り込み、数ヶ月間次々に読みすすめ、当時、最終巻とされていた2001年発行の7作目の、主人公のヘンリーとヘンリーの愛する大事な人々との穏やかな日々が今後続くのではと思わせる結末に、幸せな気持ちで本を置いた。そのまま完結したものと思っていたのだが、2018年2月、同シリーズの新刊が2016年11月に発行されているのを、ネットで書籍を探している時に知った。最終巻刊行から

1) ヘンリー・リオス・シリーズは以下の7冊からなる。Michael Nava, *The Little Death* (A Henry Rios Mystery) Alyson books, 1986, *Golden Boy*, Alyson Publications, 1988, *The How Town*, Alyson books, 1990, *The Hidden Law*, A Ballantine Book, 1992, *The Death of Friends*, C.P. Putnam's Sons Publishers, 1996, *The Burning Plain*, C.P. Putnam's Sons Publishers, 1997, *Rags and Bone*, C.P. Putnam's Sons Publishers, 2001.

2) 同性愛者の青年ヒューを中心に事件が展開した1作目、同性愛者の青年が被疑者になって事件が始まり、さらには、6作目まで登場することになる同性愛者の青年ジョシュが登場した2作目、ハリウッドを舞台に同性愛者の俳優を犯罪者として登場させた3作目、殺人に同性愛者が深く関わり、同時に、ヘンリー自身の故郷への帰還と同性愛者である姉を登場させた4作目、同性愛者であることをカミングアウトすることなく生きて家族を偽る二重の生活をした男性を事件の被害者とした5作目、同性愛者が犠牲者となった犯罪が起こる6作目、と続き、同性愛者が事件に様々な形で関わってくる7作目で終わる。全7作を通して、主人公は同性愛者である弁護士ヘンリー・リオスである。

15年の月日を経て出されたことになる。最初に目に入った読者のコメントに、ヘンリーにとって大切な人物の「死」という言葉がある。すっかり動揺して、それ以上読まないでその頁を閉じた。あらためて物語の力を思い知らされた瞬間である。虚構世界のヘンリーに起きたことに、ここまで心が動き、「これは虚構」だと言いかせても無駄なのだ。それが「虚構の真実性」を読者に完璧に信じさせ、読者の信頼を得た作家の優れた物語の力なのである。

2018年12月末、ついに新刊を読んでもみただけの気持ちの整理ができて本を注文した。最終巻に続く続編だと思っていたのだが、驚いたことに、シリーズの第一作目である *The Little Death* (1986) の改訂版で、あわせて題目も変更されたものだった。いったん完結としたシリーズの一作目を出版から30年後に書き直すという作家の行為自体が非常に珍しいことであろう。さらにその書き直しも大幅なもので、そのために、ナーヴァは *Lay Your Sleeping Head* (2016) と題名も変更している。人気を博し自らの作家としての地位も築いたシリーズ一作目の物語を、シリーズ開始時から30年後、作者は再提示してみせたのである。長い月日を経て書き直された物語における変更は何なのか、その変更が意味することは何なのか、物語の改訂が作家になぜ必要と思われたのか、そして、改訂が読者に意味することは何なのか、本稿ではこれら四点について考察を試みている³⁾。

1. 明示された性描写と民族的出自

1986年度版をすでに読んだ読者が2016年度版を読んだ時、明らかに大きく変更されたと気づく事柄が三つある。プロットの変更、具体的な性描写、そして、ヘンリーの民族的出自の強調である。後者の二つは、作者自身が2016年度版の最後につけている30頁にわたる「後書き」の中で変更理由を説明していることでもある。性描写の明示という変更について、ナーヴァが「後書き」で語っている内容の要点

³⁾ 本稿では、Micael Nava, *The Little Death*, Alyson books, 1986, Mikael Nava, *Lay Your Sleeping Head*, Korima Press, 2016, “Afterword: The Making of Henry Rios,” in *Lay Your Sleeping Head*, pp.213-241. を、それぞれ、①1986年度版（または、86年度版）、②2016年度版、③2016年度版の「後書き」（または、「後書き」と、記す。小説から原文を抜き出している場合は、原文の引用箇所後に、①から③の番号と頁数を記す。抜き出された原文の後につけてある日本語訳は、すべて筆者自身によるものである。

は以下のようなものである⁴⁾。本を出版した80年代、むやみに性的な要素が多いゲイ小説が多すぎるとナーヴァは感じており、また、物語の語りをすすめるために、性描写をどのように挿入していくのが彼自身も分かっていなかった。さらに、そうした描写を、ポルノ的な決まり文句や愚かしい婉曲語法に陥らずに書くことも、その時点では彼には難しかったのである。2016年度版で変更しようとした理由は、性的な関係の持つ意味について自分の認識が強まったことだという。ヘンリーの孤立や孤独を考慮する時、彼のヒューとの性的な関係は、ヒューの殺人事件を調査することに彼を強く駆り立てていく要素の一つであると作家は認識したのである。

もう一つの変更、2016年度版で同じく増えたヘンリーのメキシコ系アメリカ人という民族的出自の強調についての作者の説明の要点は、以下のようなものとなる⁵⁾。ヘンリーがメキシコ系アメリカ人であることは、少なくともシリーズが始まった1986年度版の刊行時にはほとんど描かれていなかった。多くの白人読者は、その当時は、リオスという名字がスペイン系の名字であることも、もしプロットで語られなかったら認識していなかったと考えられる。出自について強調しなかったのは、86年度版において、ロマン・ノワールでよく知られているような言葉の比喩的表現を「ゲイ化する」という、一度限りの実験的な性質を作品に持たせようとナーヴァが試みていたことが一番の理由である。その試みにおいては、上述の性描写と同じく、作者はヘンリーの出自の詳細な明示が物語にどのように適合できるのか分からなかったのである。二番目の理由として挙げられているのは、すでにヘンリーの出自が彼の性格の一部となっていたこともある。たとえ明示されなくても、彼の民族的な出自は、1986年度版の彼の性格にも彼の選択にも反映はされていたのである。実際には、1986年度版の第一作から15年にわたって続いたシリーズにおいて、彼の出自はだんだんと強調され、プロットの主要な要素ともなっている。改訂版を出すのにあたって、ナーヴァは、シリーズが進むにつれて次第に重要度を増した出自の要素を第一作から強調しようとしたのである。

「後書き」での作者自身の説明に依る限り、具体的な性描写と民族的な出自の強

⁴⁾ Nava, 2016, p.239.

⁵⁾ Nava, 2016, p.239.

調という二つの大きな変更の理由は、作家自身がその当時は自分の力量では描くことを難しく感じたが、今なら書くことができると考えたこと、その二つの要素の重要性を認識したこと、の二つの点で共通している。2016年度版に「前書き」を寄せた、チカーノ研究者で、UCLAのLGBTQ研究所の所長であるアルバ教授は、2016年版は、1986年版に比べて「より挑発的であり、赤裸々で」、そのため、86年度版は「改訂版のアウトライン」だったと思えるほどであり、「より深く、より立ち入ったヘンリー・リオスの紹介となっている」と言っている⁶⁾。変更によって、ヘンリーは読者にはより生身の人間として出現したとはいえよう。

3. プロットの変更

プロットも大きく変更されている。仮に出版された小説が書き直されるということがあったとして、読者を一番驚かせることは、プロット自体の変更であろう。しかも、それが、謎解きがプロットの主要な要素の一つとなるミステリー小説シリーズの一作目でなされたのである。当然ながら、後に続いたシリーズ6作の内容と矛盾することはない範囲でのプロットの変更ではある。主人公のヘンリー、殺害されるヘンリーの恋人のヒュー、そして黒幕の殺人者も同じである。しかし、彼等を取り巻く人間模様には大きな変更がある。1986年版では同じくゲイの弁護士で、ヒューとヘンリーの両方と過去において知り合いであったグラントは、2016年版では、ヒューの死後、真相を解明しようとするヘンリーの新しい恋人、つまり、彼の人生における重要な人物となり、物語の展開に主要な役割を担うようになる。1986年度版では、ヘンリーは最後まで失った恋人ヒューへの喪失感を抱え真相をつきとめようと奔走するが、2016年度版では、その過程において、喪失感を抱えながらも、捜査が進むとともに親密になっていくグラントという恋人を得るわけであり、大きなプロットの変更ではある。また、家庭内暴力を振るう父親という機能不全家族を持つメキシコ系アメリカ人のヘンリーと富裕な名門家出身のグラントという違いを持つ二人が恋人の関係になる過程が物語で描かれることで、二人の会話でも、異なる過去の経験や立場で二人が認識している米国社会の構造的不正義の話題が何

⁶⁾ Hames-Garcia, Michael, "Foreword," in *Lay Your Sleeping Head*, 2016, XI.

度か交わされることになる。そのため、必然的に、2016年度版の方が、ヘンリーの社会正義への思いが強調されているような印象を与えることは確かである。

また、このプロットの変更に沿う形で、物語の最後も異なるものとなる。1986年版で物語の最後に吐露されるのはヘンリーの強い正義への思いとヒューを失った喪失感の二つである。最後の場面で、ヘンリーは二人の人物と言葉を交わす。その殺人の黒幕と殺人事件の解明に協力してくれた同僚テリーである。殺人の黒幕に最後に声をかけるのはヘンリーである。そして、喪失感を示すヘンリーに言葉をかけるのは、ヘンリーの気持ちに理解を示してきたテリーである。

“I understand that,” I said, “but I have two things on my side that you do not.” “What?” “Time,” I said, “and justice.” (①—p.163) (「それはそうですね。」と私は言った。「しかし、あなたが持っていないことが私には二つあります。」「何だね。」「時間、私は続けた。」「そして、正義です。」)

“Maybe,” I said to Terry, “I never wanted justice but just to vent my grief about Hugh. “She shook her head. “Grief is half of justice,” she said, and added, a moment later, “the other half is hope.” (①—p.165) (「おそらく」と私はテリーに言った。「正義を望んでいたのではなく、ヒューの死を悲しむ気持ちを向けていただけかも。」彼女は頭を振った。「悲しみは正義の半分。」彼女はそう言って、そしてすぐにつけ加えた。「残りの半分は希望よ。」)

一方 2016 年版では、殺人の黒幕である人物と最後に交わす会話で、最後の言葉と言うのは、その黒幕の方である。事件の展開の中で、ヘンリーの恋人となったグラントについて、疑念を起させるような言葉をヘンリーに投げつける。

“You deserve whatever happens to you,” I said. “Perhaps so,” he said. With a hard smile, he added, “A word of advice, Henry. You shouldn’t be so trusting of your bedmates.” “Hugh never gave me any reason not to trust him,” I replied. “I’m not talking about Hugh,” he said. “I meant Grant Hancock.” (②—p.282) (「自業自得ということです。」と私は言った。「たぶんそうだろう。」と彼は言った。硬い笑顔を向け、付け加えた。「一言忠告をしよう、ヘンリー。君は自分がベッドを共にする者を信じすぎないほうがいいだろうね。」「ヒューは彼を信じないような理由を一切私には与えなかったですけどね。」と答えた。「ヒューのことを言っているのではないよ。」と彼は言った。「私はグラント・ハンコックのことを言っているんだ。」)

それを受けてのヘンリーとグラントの会話が、1986年版での同僚との会話に置き換わることになる。ヘンリーからそれまでグラントが隠していた事実が分かったと告げられて、グラントは、なぜ正直に言わなかったかの~~か~~について説明し、ヘンリーの赦しを請う。白黒をはっきりさせるヘンリーに誤解されるのが嫌だったから言わ

なかったのだと説明をしたグラントに、ヘンリーは、再度問う。もし自分が見つけ出さなかったら、グラント自身から真実を彼に話す気があったかどうかをである。

"If I hadn't figured it out for myself about you and Barron, would you have ever told me?" A quick, almost involuntary shrug, "What would have been a point?" he asked softly. "It was over!" (②—p.287) (もし僕が自分で君とバロンのことについて見つけ出さなかったとしたら、君は僕に話していたかも。」すぐに、そしてほとんど無意識に肩をすくめて、「何の意味がある？」と彼は穏やかに尋ねた。「もう終わったことだよ。」)

そのグラントに対して、ヘンリーは、彼の顔をもう見ることなく、別れを告げ、そのことが意味することを理解して、グラントは静かに立ち去る。物語で最後の言葉を発するのは、2016 年度版では、ヘンリーとなる。

I said, without looking at him, "Goodbye, Grant." I heard him get up and listened to his footsteps padding softly in the sand as he walked away. (②—p.287) (顔を見ないまま、私は言った。「グッドバイ、グラント」彼が立ち上がるのが聞こえた。歩き去っていく間、砂浜を静かに歩む彼の足音を聞いていた。)

86 年度版で、殺人者に、そして同僚に、正義への熱情とヒューを失った喪失感を吐露したヘンリーは、2016 年度版では、そうした機会を失ったともみえる。しかし、それだからヘンリーの正義への熱い想いは最後に示されなかったのかと問えば、否である。2016 年度版では、ヒューとグラントという二人の恋人の喪失を、一人は 86 年度版と同じ理不尽な殺人で、もう一人は自らの選択で、自分の人生から失う。後者の喪失では、ヘンリーは自身の選択において、自らの痛みを取ることで、彼自身の譲れない正義を語るといえよう。どうせ終わったことだからいいだろうと咄嗟に本心を見せてしまう恋人のグラントは、ヘンリーの保持する高い「正義の基準」には見合わなかったのである。一方で、静かに歩むグラントの足音をしっかりと「聞いている」ヘンリーに、グラントへの強い愛情も示されている。それでも、ヘンリーは、自分の正義の方を譲ることはしなかったのであり、また出来なかったのである。“Goodbye, Grant.”—86 年度版で口にされた正義への強い思いを、今度は、雄弁な言葉ではなく、この簡潔な一言で示したわけで、ヘンリーの正義感が凝縮されたといえるような言葉となる。

1986 年度版での、人によっては青臭いと感じる人もいるであろう、若いヘンリー

の進むような正義についての言葉と、2016 年度版の、言葉ではなく、自らの選択による痛みを抱え、自分の正義を優先した姿、という変更の意図について、ナーヴァが「後書き」で触れているわけではない。その代わりに彼が「後書き」で書いているのは、この 2016 年版の最後の言葉がどこから来たのか、ひいてはプロットがどのように変更されたのはなぜなのかを、読者に自然に理解させるような、自分に影響を与えた物語についての言及である。5 節と 6 節でそれを見ていくことにする。

5. 作家に影響を与えた物語—ブランドステッター・シリーズ

2016 年度版の最後についている 30 頁にもわたる長いナーヴァによる「後書き」には、主に、ナーヴァが同性愛者を登場人物とする作品を書く作家になるまでの、少年時代から作品を出版するまでの経緯、弁護士時代の経験、彼が強く影響を受けた作品、そして、改訂版での二つの大きな変更理由の説明が記されている。彼に影響を与えた本として、二人の作家の作品が挙げてあり、それらがナーヴァに与えたものについて説明している。本節では、その内の一人、ジョゼフ・ハンセン (Joseph Hansen) [1923-2004] による、同性愛者の保険会社の調査員ブランドステッターを主人公にしたミステリー・シリーズを取り上げる。第一作目の *Fadeout* (1971) を、1976 年か 77 年に読んだというナーヴァは、物語が、ブランドステッターが彼の長年のパートナーを失って 6 週間後に始まり、一時は自殺さえ考えるような状態で激しい喪失感を感じながら、不幸な死を遂げた恋人を想う場面で、その恋人が、ロード、つまり「男性の恋人」であると分かった瞬間、興奮したという⁷⁾。当時の社会状況と自分の気持ちを以下のように説明している⁸⁾。その頃、同性愛者であると知ってナーヴァを雇用するような法律事務所は米国には皆無であり、同性愛者だと知って部屋を貸すような大家もなかった。男性との性行為によって刑務所に入れられるようなことがほとんどの州で起こっていたのである。アメリカ精神医学会は、1973 年に同性愛は精神病ではないと認め、1974 年にカリフォルニア州はソドミー法を廃止してはいたが、当時、同性愛者は、一般には完全なアウトロー的存在であ

⁷⁾ Nava, 2016, pp.217-218.

⁸⁾ Nava, 2016, p.218.

り、病気で、罪深く、犯罪者、と広く見なされていた。その中でナーヴァは精神的に非常にストレスを感じていたのである。

It is terribly hard to be hated for a characteristic over which one has no choice and no possibility of changing. To be hated for this reason is morally, psychologically and emotionally exhausting; no human being should have to endure it. Even those of us who fought the hatred sometimes surrendered to feelings of hopelessness when it seemed like things would never get better. In these moods we wondered whether they were right about us; that we were, in some fundamentally way, diseased and condemned. (③—p.218) (選択肢もなく、変更できる可能性もないような特徴によって嫌悪されることは非常につらいことだ。この理由で嫌悪されることは、道徳的にも、心理的にも、また感情的にも、疲れさせるのだ。どんな人間もそれに耐えることを要求されるべきではない。そうした嫌悪と闘った我々でさえ、時には、何も好転することはないという絶望にくじけた。こうした気持ちの時には、自分について思っていることが正しいのだろうかと思ってしまう。つまり、自分達は、何か根本的なところで、病的であり、不適格なのだと。)

ナーヴァによれば、その当時のゲイ文学では、ポスト・ストーンウォール文学なるものが広まっており、もてはやされているのは、自らを「解放する」類のものであり、薬物を摂取し、ダンスクラブへ繰り出し、感情抜きセックスをし、目に見える形で所属するコミュニティを持たない、そんな不運な自己嫌悪に満ちた同性愛者であった。高校生の時のナーヴァが、市立図書館で一目を忍んで同性愛についての本を探していた時、そこで見つける本のほとんどは、同性愛者を、大都会に住む、やせた派手な白人で、女装し、公衆トイレでセックスをする、そのように描く心理学のテキストだった。一方、それからすると、1970年代半ば、ナーヴァが大学生の頃出合ったゲイ文学は、怖いぐらいに進化していたけれど、これらほど彼の人生や願望からかけ離れているものもまたなかったのであるとナーヴァは言う。ナーヴァは、その中で、自分が同性愛者だからといって、自己嫌悪でいっぱいになることも、または隠遁して生きることも、その両方とも拒んでいた。その時出合ったのがハンセンの本であり、それが意味したことを、「私の夢と願望を正当と認めてくれたもの」と深い感謝をこめて表現している⁹⁾。そのシリーズの主人公、ブランドステッターはナーヴァになりたい自分をまさに投影できるものとなる。

⁹⁾ Nava, 2016, p.219.

Brandsetter was the kind of grown-up I could imagine myself becoming: a competent professional who was also unapologetically gay and who demanded to be respected on both counts. For me, Joe's novels were the fiction of gay liberation. (③—p.219)

(ブランドステッターは私自身がそうなることを想像し得るような大人であった。有能なプロフェッショナルで、紛れもなく同性愛者でもあり、その両方の点において尊敬を要求している。私にとって、ジョーの小説が、ゲイリベレーションのフィクションだった。)

1980年代、まだインターネットが登場しておらず、ナーヴァが自著の最初の出版をしたいと努力していた時期、メディアの同性愛者の描写というものは、存在しないか、または軽蔑や非難であるかのどちらかであり、本が同性愛者の物語やあるがままの人生を伝えるための唯一の手段だったのである¹⁰⁾。そう記すナーヴァは、その時の同性愛者の典型的な「本棚の本」についてこのように記している。

Every gay man I knew had his half-shelf of the same gay novels, from New York writers like Andrew Holleran and Edmund White, San Francisco's Armistead Maupin and the Brandsetter books of Joe Hansen as well as the classics like Gore Vidal's *The City of the Pillar*; Isherwood's *A Single Man* and John Rechy's *City of Night*. (③—p.233) (私が知っている同性愛者の男性は、本棚の半分が同じゲイ小説で埋まっていた。ニューヨークからなら、アンドリュー・ホラーラン、エドモンド・ホワイト。サンフランシスコなら、アミステッド・モービンやジョセフ・ハンセンのブランドステッター・シリーズ。そこに、ヴィダールの『*The City of the Pillar*』、イシャウッドの『*A Single Man*』、そして、ジョン・レチャーの『*City of Night*』といった古典的な作品だ。)

それらの本がたとえ正確には自分達を反映していない時でさえ、それらが唯一の文化的に自分を映し出してくれる鏡であり、自分達の人生が正当なものと感じさせるのに十分なだけの類似は存在したから、彼は何度も何度も読み返したのだ、という¹¹⁾。本で言語化されていることが意味したことは、さらにこう言い表されている。

“Words validated us, reminded us we were not alone and that, in the face of society's still relentless animus, our struggle to live authentic, open lives had a moral purpose. That, as Paul Goodman wrote in a poem, “We deviate but do not err.” (③—p.233) (言葉が私達を正当化してくれた。自分達が一人ぼっちではないと、そして、社会の相変わらずの無慈悲な憎しみに直面して、自分達が真正の自由な人生を生きようとする努力は道徳的な目的をもっているのだ、と思わせてくれた。ポール・グッドマンが詩に書いたように、「私達ははずれている、でも過ちを犯しているのではないのだ」と。)

¹⁰⁾ Nava, 2016, p.232.

¹¹⁾ Nava, 2016, p.233.

最後に、ブランドステッターの作風のナーヴァに対する影響を、両者のプロットの立て方という観点から見ておこう。例えば、ブランドステッターの一作目に登場する、ナーヴァに大きな影響を与えたヒーローがいるが、そのヒーローの恋人の死後に物語が開始されるというプロットは、ヘンリーが恋人ヒューの死を物語の開始からほどなく迎えて、それから本格的に物語が始まるというナーヴァの一作目のプロットと明らかな共通性があるのである。

6. 作家に影響を与えた物語—マーロウ・シリーズ、オーデンの詩

「後書き」には、自分に影響を与えたものとして、誰もが知る著名な探偵シリーズがもう一つ記されている。レイモンド・チャンドラー (Raymond Thornton Chandler) [1888-1959] のマーロウ探偵シリーズである。ナーヴァは、作品に興味を持った理由を以下のようにいくつか挙げている¹²⁾。まず、数多くの読者がそうであるように、チャンドラーの独特の作風である。次には、マーロウが、アウトサイダー、しかも、同性愛者の少年が共感できるようなアウトサイダーである点を挙げる。マーロウは、社会が尊敬すべきとし、かつ、めったに見せないような美德—忠誠心、勇気、清廉さ—を具現化した人物であり、同時に、彼の私立探偵という身分のために、社会的には軽蔑の対象になっている。彼に向けられる社会的軽蔑にもかかわらず、彼こそが、「まともな人達」が困難に直面して頼っていくことになる、そして彼等がご立派な社会の表面からは隠れている卑しい秘密を露わにすることになる、人物なのである。こうした社会の偽善に対して、彼の立場がリングサイドの席となっているのである。ナーヴァはそう説明して、本を読んだ時に彼の感情をこう表現する。

Gee, I thought, who does that remind me of? Oh, right, me. (③—p.237)

ナーヴァの説明は続く。マーロウのように内面においてまともな人間であろうとするが、それは、世間が同性愛者に押し付ける特徴や彼等を縛る軽蔑とは相容れないことになる。その軽蔑こそ、生産的で、正直で、道徳的であろうという彼の決意を

¹²⁾ Nava, 2016, p.237. ただし、1986 年度版に記されていた以下の書評のように、理由は何であれ、少なくとも、二人の関係性が似ていると思った読み手はいるのであろう。“Lawyer Henry Rios’s Loyalty to wealthy wastrel Hugh Paris strongly recalls the male bonding in Raymond Chandler’s Classic ‘The Long Goodbye.’” (Publishers Weekly)

強めさせ、社会のステレオタイプに絶対屈しないと思わせるのだが、同時に、丁度マーロウのように、社会の偽善に内々関与していることになる。同性愛者は社会で恐れられる。性的に人を食いものにする人物や小児愛者は同性愛者だと、統計的には間違いにもかかわらず、信じ込む多くの人々、同性愛の男性は女性を嫌うと勝手に言っているけれど、実際、法廷にあらわれる暴力を振るわれた女性は、夫やボーイフレンドが加害者であるという事実、女性を圧迫するのは、実は同性愛の男性ではなく、ミソジニー（女嫌い）の男性であること等々を次々と挙げていく。こうした事実ゆえに、ナーヴァには、「チャンドラーの暗い虚構世界での私立探偵マーロウが、異性愛者中心の現実社会でおこる同性愛者の持つポジションのメタファーになっている」と感じられたのである¹³⁾。

ナーヴァはさらに、マーロウ探偵シリーズの代表作の一つ、*The Long Goodbye* は、同性愛者の彼にとっては、マーロウが同性である男性に恋に落ちたと思わないでは読むことはできなかったと言う。彼によると、若々しい容貌を維持し、真っ白な髪で、名前が、女性、男性、どちらでもありうる人物、レノックスと、そのレノックスを連れ帰って介抱するマーロウというプロットにおいて、マーロウに対するレノックスの役割が“damsel in distress”（「囚われの姫君」）そのものだと思わないで読むことは「同性愛者には難しい」のである¹⁴⁾。そして、この *The Long Goodbye* は、1986年度版の *Little Death* に反映していると言う。ヘンリーとヒューの出会い、恋の始まり、二人の関係、これらが論理的な展開となったのは、この小説と、前述したブランドステッター、両方に依っており、読者として暗に示されていると感じたマーロウとレノックスの遭遇時の関係は、自分の物語では明示されたのだという。そのナーヴァの説明箇所である。

In the first chapter of *The Little Death* when Rios meets Hugh Paris I made explicit what seemed to me was implicit in *The Long Goodbye*: two men meet and fall instantly in love or lust or some noir combination of both. *The Long Goodbye* and Joe's novels gave me the warrant I needed to make this leap. I didn't think then, and don't think now, that it violated the code of noir; it simply extended it, taking it to one logical conclusion. (③—p.238) (リオスがヒュー・パリシと出会う *The Little Death* の第一章で、私は、*The Long Goodbye*

¹³⁾ Nava, 2016, p.257.

¹⁴⁾ Nava, 2016, p.238.

では暗示であると思われたことを明示した。つまり、二人の男性が出会い、すぐに恋に落ちる、または関係を持つ、または、両方を持つノワールのコンビネーションである。*The Long Goodbye* やジョーの小説が私にこの跳躍をする保証を与えてくれたのである。その時にそう考えたわけでもないし、今でも考えるわけではないのだが、そのことがノワールのコードを侵したとはね。それは単にコードを拡張し、一つの論理的な結論に導いたのである。)

作者の説明に依る限り、1986年度版のタイトルの *The Little Death* が、*The Long Goodbye* の中の有名な言葉— “To say goodbye is to die a little.¹⁵⁾”—から取られたと考えるのは極めて自然なことだろう。

それでは、2016年度版の新たな題名はどこから来たのだろうか。これについては、物語が始まる前の一頁を使ってオーデン (W.H. Auden) [1907–1973] の詩 *Lullaby* が記され、読者は、その詩の一行目が題名の出典となったことが分かるようになっている。ナーヴァは「後書き」の最後の方でも、詩を題名とした理由について説明をしているが、「後書き」の前半でも、オーデンについて述べている。上述した二つのミステリー・シリーズ以外に、もう一つナーヴァが自分に大きな影響を与え深い関わりあいをもった虚構世界として詩を挙げている箇所である。以下のナーヴァの説明が示すように、彼と詩との関係は密接である¹⁶⁾。少年時代、孤独の中でナーヴァは、自分が口にはできない感情を詩に表現し始める。同時に、性的な感情や疎外感のような、自分が青少年の時代に心をすっかり奪われていた事柄について詩に綴っている詩人達がいることにも気付く。こうして詩は、ちょうど20世紀最大の詩人と称されるオーデンが “an affirming flame” と呼んだものを、ナーヴァのために表象してくれるものとなり、ナーヴァは、20代の前半までは、詩だけを読み、また創作したのである。改訂版を出すにあたって変更されたタイトルはそのオーデンの詩からきている。

Lay Your Sleeping Head comes from the first line of W. H. Auden’s Poem, “Lullaby,” which is not only of the greatest poems in English, but which was written by one man to another. It seemed appropriate to what this book became in the rewriting.

(③—pp.240-241)

一人の男性から別の男性に向けてあり、同性愛の関係が書かれたと解釈されている、

¹⁵⁾ Chandler, Raymond, *The Long Goodbye*, Random House, p.365.

¹⁶⁾ Nava, 2016, p.214.

オーデンの詩の最初の言葉を、まさにその理由で改訂版の題名に使ったのである。

7. 作者にとっての本

「後書き」が読者に明らかにするのは、ナーヴァは同性愛者として葛藤する人生を一貫して自分の読みたいような本を求めながら生き、同時に作家として次第に成長したことである。ナーヴァにとって手に取る本の持つ意味がとても大きく、同時に、彼の創造した本について強い自負心をもっていることは、同性愛者の作家達が過去の自分にあてた手紙を掲載している本¹⁷⁾からもうかがえる。ナーヴァは、14歳の自分にあてた手紙で、その時が人生の一番苦しい時期であった理由は、自分が同性愛者であると分かったからではなく、セクシュアリティに悩んで自分自身の感情について理解するために図書館で得た本が彼に希望を与えるものではなかったことにあったと記している。その当時、学校で一人の少年に恋心をいだいた彼は、伝えることも、見返りを求めることもできない、また想いを秘めておく苦しさを打ち明けられる者もない、まさに居場所なき自分に苦しんでいたが、結局、唯一の情報源だったものも彼を混乱させる類のものだったのだ。

ナーヴァは、当時遭遇したような本に書かれている—同性愛者は性的なことを求めている—のではなく、愛すること、そして愛されることを求めているのだから、本の内容は間違っているとときに君にも分かるよと14歳の彼に伝える。そして最後に、こう教えるのである。

And you, because you said no to what the world told you about being gay, will have helped bring that day to pass. You will take your pain and convert it into words — all the words you are unable to say now—and write the kind of books about being gay you wish you had found on the shelves of the Sacramento Central Library for others to find, to help lighten their loads. You will become a lawyer and work for your own equality and the equality of others like you. Best of all, you will find your friend, your companion, your partner.¹⁸⁾ (世界が同性愛者であることについて君に伝えていることを拒むことで、日々を切り抜けていこう。今に君は、その苦悩を言葉に変える、今は口にすることができない全てを入れ込んで、同性愛者であることについての本を書くよ。14歳の時の君がサクラメント中央図書館の本棚で見つけられていたらと思うような類の、他の人が見つけて生きていくことが楽になる本を。君は弁護士となり、自身の、そして君のような他者の平等のために働くことになるんだよ。そして、何よりも素晴らしいことに、君は、友達を、一緒に生きる人を、パートナーを、見つけるんだ。)

¹⁷⁾ *The Letter: Queer writers, notes to their younger self* Sarah Moon (ed.), Scholastic 2012, pp.91-94.

¹⁸⁾ *The Letter: Queer writers, notes to their younger self*, pp.93-94.

ナーヴァは、若い時自分が恐れていたことは今の自分自身の幸せの源となり得たことと確信し、若き日には言葉にできなかったものを求めて産み出した虚構の物語は「14歳の自分」に読んでほしいような作品に現実世界でなり得たことを理解している。同時に、弁護士でもある作家は、「他者の平等のために働く」自分であることを若き日の自分に伝えている。読者として読む本、作家として書く本、どちらにおいても、ナーヴァにとって本は大事な存在なのである。

「後書き」で、彼に影響を与えたチャンドラーの大事な作品を挙げているナーヴァだから、30年を経て改訂した本では、強い思い入れがあった *The Long Goodbye* を意識して、最後の言葉をヘンリーに言わせるようにしたと考えていいだろう。1986年度版では、題名には反映させても、プロットにおいては作者だけが意識をしていたというレベルである。一方、2016年版では、*The Long Goodbye* を作者が意識していることを読者の誰も否定できないようにプロットも変更している。最後の別れの場面は、2作ではほとんど同一の設定といっているだろう。*The Long Goodbye* の方は、一般的に、また異性愛者には、二人の友情関係を持つ男性間のことと読まれる別れの場面であり、ナーヴァの2016年度版は、恋愛関係にある二人の男性の間の別れの場面である、という違いはあっても、当事者二人の間で問題になっているのが、「正義」に対する異なる基準である点は同じである。さらに、ナーヴァの解釈によるならば、前者も、同性愛者には恋愛感情をもっていると解釈される二人の男性ということだから、さらに両作品は類似していることになる。

The Long Goodbye で、マーロウは、“goodbye”という言葉についての説明を、今や別人・別名の姿で現れたレノックスにする。

“So long, amigo. I won’t say goodbye. I said it to you when it meant something. I said it when it was sad and lonely and final.”¹⁹⁾（「さよなら、アミーゴ。『グッドバイ』とは言わないね。私はこれを何か大事なことを意味した時に君に口にしたのだ。悲しく、寂しくて、そして最後の時にね。」

そして、この言葉どおり、マーロウはレノックスには、“goodbye”とは言わない。

¹⁹⁾ Chandler, p.378.

“So long, Senor Maioranos. Nice to have known you—however briefly.” “Goodbye.”

²⁰⁾ (「ではこれで、マイオラノス氏。短い間でしたが、お目にかかれてよかったですよ。」「グッドバイ」)

“goodbye”を言うのは、レノックスの方である。ナーヴァの2016年度版では、ヘンリーが“goodbye”を言う。“goodbye”とは言わない理由を説明したマーロウと、その言葉を最後に口にしたヘンリー、この両者の違いを読者がきちんと意識することをナーヴァは期待したはずだろうし、それによって、ヘンリーの「悲しく、寂しくて、そして最後の」お別れの言葉の意味が読者にはさらに分かるといえるのだ。

以上の考察に基づいて、30年後の改訂の理由について整理してみたい。まず、明らかな理由としては、すでに一節で述べたように、作者自身の言葉による説明—二つの要素の重要さの再認識と今ならそれらを物語に入れることができるという自信—が挙げられる。次に、テキストに依れば、2016年度版が作者に影響を与えた作品の痕跡を86年度版より示すものになっていることが、改訂の理由の一つを論理的に「推測」し得る根拠となろう。「同性愛者」と作家には思えた *The Long Goodbye* のプロットを明白に模倣し、新たな題名に、オーデンの同性の恋人にあてた詩の始まり、*Lay Your Sleeping Head* を取ったという2016年度版には、若き日の自分に影響を与え作品創作に至るまでを鼓舞してくれた優れた虚構世界に対する読者としての敬意や感謝を込めてのオマージュ以上の、「同性愛」を描いた自作品への作家の強い意識が明らかに見えている。それでは、他に作者自身の改訂版の理由として考えられることはあるのだろうか。考察を続けてみたい。

8. 本棚の本、表紙

確かに作者によって意図的にされたのだと、86年度版を読んだ読者であれば、2016年度版を読んで気づくであろう変更に、「本棚の本」がある。一つは同じ本棚に並ぶ異なる本、そして二つ目は、あらたに描かれた本棚の本である。まず、同じ本棚の本の変更。86年度版では、ヒューの家を初めて訪れたヘンリーが本棚の本について気づくシーンは以下のようなものである。

²⁰⁾ Chandler, p.379.

I found myself at the bookshelves which held a couple of dozen books. Many of them were worn-out paperback, Tolkien, Herman Hesse, a volume of Ginsberg – the library of a college sophomore of the sixties. (①—p.39) (何十冊もの本が並ぶ本棚があった。多くは、擦り切れたペーパーバック、トルーキン、ヘルマン・ヘッセ、ギンズバーグの一卷—60年代の大学2年生が持っているような図書だった。)

一方、2016年度版では、同じ家のヒューの本棚の本が変更されている。

A built-in bookshelf that held a couple of dozen books. Old, worn-out paperbacks, Tolkien, Hermann Hesse, Howl— a college sophomore's library. The Joy of Gay Sex looked to be the newest addition. Next to it was a worn-out copy of The Little Prince, the pages almost in tatters. (②—p.53) (数十冊の本がビルトインの本棚に並んでいた。古い、擦り切れたペーパーバック。トルーキン、ヘルマン・ヘッセ、ハウルといった大学2年生が持っているような本、『The Joy of Gay Sex』が一番最近加わった本のように見えた。その横に、ボロボロになった『The Little Prince』。)

また、1986年度版では存在しなかった「本棚の本」が2016年度版には登場する。両作品ともに、ヘンリーがグラントを訪問する場面がある。すでに記したように、グラントは2016年度版では、86年度版よりはるかに大きな役割を担い、ヘンリーの人生にも大事な存在となる。そのグラントの家をヘンリーが訪れた時の場面で、86年度版では記されていなかったグラントの家の本棚が、2016年度版ではきちんと描写され、そこに並ぶ本が記されている。

On a bookshelf was the same small collection of gay novels that every gay man owned: City of Night, The City and the Pillar, A Single man, Dancer from the Dance, Tales of the City. He also owned The Joy of Gay Sex which reminded me of going through Hugh's books in the forlorn cottage where he had camped out. (②—p.185) (本棚には、同性愛者が持っているようなゲイ小説のささやかなコレクションが並んでいた。『City of Night』、『The City of the Pillar』、『A Single Man』、『Dancer from the Dance』、『Tales of the City』。グラントもまた『The Joy of Gay Sex』をもっていた。その本は、かつてわびしいコテージで、私がヒューの本を見た時を思い出させたのである。)

2016年度版で、ヘンリーにとって特別の関係となるヒューとグラント、その二人の「本棚の本」を示したことで、そして、86年度版ではヒューだけが彼にとってその時点での特別な感情を持つ相手であったことを考えると、ナーヴァは意図的に2016年度版で「グラントの本棚」を付け加えて記したと考えていいだろう。本棚の本は、両方とも初めて訪問をするヘンリーの目にも「見える」。そして、ヘンリーは、自

分にとって個人的な深い人間関係を持つことになる二人の人物の「本棚の本」が何であるかをきちんと「見る」のだ。また、すでに描かれていた 86 年度版のヒューの本棚の本のリストを変更したことも興味深い。1986 年度版では、当時の大学生の典型的な本の並ぶ本棚としていたのに、2016 年度版では、明らかに同性愛者の持つ本棚を意識しているのであり、ヒューとグラントは、その当時同性愛者の間では話題となっていた同性愛者の性について書かれた本²¹⁾を共通して持っているのである。「本棚の本」が示すことを、ナーヴァがとても重要と感じているからこそ、改訂版にあたって、二つの本棚にまつわる変更が意図的にされたと考えていいだろう。そして、両方の本棚に同性愛者の性について書かれた同じ本を入れたことは、2016 年度版で性描写を明示したこととも深く関係しているはずである。

読者が気づく大きな変更は他にもある。題名まで変更されたのだから、1986 年度版から表紙が変わること自体は驚きではないだろうが、2016 年度版の表紙の図柄は最初に手に取った時それだけで驚きのはずだ。表紙一杯に半裸の男性二人がベッドに寄り添って横たわっている写実的な絵が描かれている。1986 年度版から 7 冊のシリーズの表紙では小さなイラストが使われることはあっても、同性愛者の物語をイメージさせるような表紙は一度もなかった²²⁾。それなのに、2016 年度版では、男性二人が仮に異性の二人であったとしても、一般的な本の表紙として見かけることがないような写実的な図柄が描かれている。表紙だけ見ればポルノ小説ではないかと思われそうで、本屋であれば手に取るのも、それをレジに持っていくのもためらうだろうと思われるほどで、本を初めて手にした時に戸惑う読者も多いはずだ。

ここまで変更について考察をしてきて明らかになってきたのは、最初に考えた以上に、2016 年度版はナーヴァの挑戦的な姿勢を示していることである。かつて同性

²¹⁾ Silversten, C., White E. *The Joy of Gay Sex*, 1977.

²²⁾ 過去の 7 作（英語版）の表紙については、筆者の所有している作品に基づいている。念のため、2018 年 2 月時点でネットで販売されている 7 作品（英語版）も確認をしたが、ロサンジェルス情景、暗闇のピストル、仮面（または死相）、バーらしき場所に座っている男性、刑務所の光景がある。表紙全体の大きなイラストとしては、右左と対照的に置かれた、喫煙する男性と険しい顔をした背広姿の男、とギリシア彫刻のように見える半裸の男性（殺人の犠牲者とも見える）のシルエットが斜めに横たわっているものがある。どちらも、2016 年版のような写実的な絵ではない。

愛者は性的なことだけを求めているとする社会の持つステレオタイプに怯えた少年は、成長して、愛し愛されることを求める普遍的な人間像としての同性愛者の物語を描くことには、すでに30年前に成功した。しかし、その時点では、作家には、性描写を物語の語りにどのように入れ込めるのかは明瞭ではなく、また難しくもあったのである。その同じ作家の改訂版、具体的な性描写を入れた2016年度版、の表紙が、ベッドに横たわる半裸の二人の男性なのである。新しく題名として引用したオーデンの詩での抽象化された想念の具象化でもあり、表紙自体が同性愛者の性行為を簡単に連想させるものとなっている。それは、もう一つの変更、性に関する本が初めての訪問者にも簡単に「見える」ように同性愛者の本棚に陳列されていることとも繋がる。また、一瞥では二人の白人男性がいるように見える表紙も、男性のうち一人はもう一人より明らかに肌が浅黒いメキシコ系アメリカ人、と肌の色が異なっている²³⁾。物語での二つの変更—明示される性行為と民族的出自は、この表紙にすでに両方とも示されていることになる。「関係性が全てにおいて明示された同性愛の物語」を、誰もが一番に目にする表紙を含めて、登場人物の本棚の本さえも変えて、提示をしているのである。

同性愛を扱う作品が「同性愛を描くゆえに」ポルノグラフィックであるとする社会のステレオタイプも²⁴⁾、「同性愛を描くゆえに」、同性愛者の「個人の本棚」でも時には「見える」ようには置かれず、ましてや「万人のための図書館」（少年時代、セクシュアリティに悩んだ作者が、自分が支えにできる本を一冊として見つけられなかった場所でもある）開架さえされないこともある、そうした偏見によって引き

²³⁾ 表紙の二人の肌の色の分別が示すように、民族出自の明示化が社会で異なるグループ間の複雑な関係性を明るみに出すことに必然的に繋がる。“the category ‘Latino’ or ‘Hispanic’ problematizes certain prevailing assumptions about racial formation in so far as it becomes “not so much a third race...black and white melding into brown, as an evidencing that race is politically fabricated and contested” (Pepper, A. *The Contemporary American Crime Novel: Race, Ethnicity, Gender, Class* Edinburgh University Press, 2009, p.158.)

²⁴⁾ “The most persistent and damaging myth is the assumption that GLBT literature is pornographic. Because homosexuality historically was associated with deviant, criminal behavior, homosexual literature was similarly branded and demonized as obscene.” (Bosman, E., Bradford, J.P. *Gay, Lesbian, Bisexual, and Transgendered Literature*, Libraries Unlimited, 2008, p.29)

起こされる社会での行為を作家は知っているはずである²⁵⁾。そして、読者は、表紙に驚くだけでなく、それがクロゼット内ではない、いわばカミングアウトした状態といえる「表紙」であるがゆえに、社会での他者の視線を意識して、本棚への陳列も含めて、本の扱いを自らに問うしかないことを作家は分かっているはずだ。何よりも、86年度版ではできなかった、明示された性行為や民族的出自をロマン・ノワールの虚構世界の語りを遮ることなく入れようとする時、表紙からすでに「見せる」ことはむしろその語りを困難なものにさせることを作家は分かっていたはずだ。だから、作者は、社会にも、読者にも、そして自分自身にも、挑戦的といえるのである。86年度版のままでも、この30年間同性愛者の本棚に並べてもらう本、同性愛者を超えて多くの読者に読まれる本を創造したといえるにも関わらず、こうして成功をおさめたミステリー・シリーズの第一作を書き直す——その行為自体がすでに挑戦的ではあるのだろう。その時点で、作家は虚構世界が持ち得る永遠性を当然意識したはずだ。そして、この物語の永遠性は、「関係性が全てにおいて明示された同性愛の物語」として得るのだという作者の覚悟が見えてくるのである²⁶⁾。

25) 米国図書館協会 (American Library Association) は、1990年～2000年の間、515冊の図書が、2000年には、84冊の図書が、同性愛を理由に批判の多い本のリストにはいったとしている。同性愛は、批判理由の六位にはいつている。LGBTの本に対する圧力をかける様々な試みは存在しながらも、2004年の米国における世論調査では、調査人口の27パーセントが、LGBTの本は図書館から取り除かれるべきと答えて、前回の調査の45パーセントからは大きく減少している。(Bosman E, Bradford, J.P., p.31) 米国図書館協会が発表した2004年批判の多かった図書トップ10には、同性愛をテーマにした図書が3冊含まれている。それには、絵本 *King & King* が含まれている。(「子どもにみせたくない図書の扱いが議題の話題に(米国)」(Current Awareness Portal 図書館に関する情報ポータル 2005.6.15.) 米国図書館協会が発表した2006年の最も批判の多かった図書トップ10のうち5点が同性愛を扱っている。それには、児童書 *And Tango Makes Three* (実話に基づいた同性愛のペンギンカップルの話) を含んでいる。(「2006年に最も批判を受けた図書は? (米国)」Current Awareness Portal 図書館に関する情報ポータル 2007.4.11.)

26) 永遠性への答えには月日が必要であるが、以下のような反応をすでに得ている。“*Lay Your Sleeping Head is not the Little Death. The Little Death is a good read and a promising first novel. Lay Your Sleeping Head is something most novelists spend a lifetime trying to produce...As to American letters, this new novel puts me in mind of books like Ann Perry's The Street, Richard Wright's Native Son, and John Steinbeck's Grapes of Wrath.*” (“Foreword,” in *Lay Your Sleeping Head*, by Michael Hames-Garcia)

9. お わ り に

7作で完結とされたミステリー・シリーズの、その一作目が、刊行から30年後、シリーズ終了から15年後に、改訂される——こんなことが今まであったのだろうか。調べてはみたが、刊行されていた短編から長編への改訂、Web版を紙媒体での発行する際に改訂、といった事例はあっても、完結したとして一旦刊行されたシリーズの一作目が大きく改訂されるという事例は他には見つからなかった。続く6冊の続編の展開に影響を与えないにしても、プロットもタイトルも変更されたわけである。シリーズをすでに読み終えている読者にとっては驚きであろう。実は、30頁近い「後書き」で、ナーヴァは、最後の件で、この書き換えに関しての読者の側の思いに触れている。読者の中には30年後の書き換えという行為に騙されたような気がする読者もいるだろうと認め、そして多分そうであろうともいうが、それにはたったの二文を費やしているだけである。そして、その二文は明らかに、その続きを書くための前書きに過ぎないと分かる。ナーヴァはこう記す。

But the Rios book have turned out to be my life's work as a writer and from my perspective it remains unfinished. I agree with what Paul Valery wrote about literary works: "A work is never completed except by some accident such as weariness, satisfaction, the need to deliver, or death; for in relation to who or what is making it, it can only be one stage in a series of inner transformations." (③—p.241) (しかしながら、リオス・シリーズは作家としての私の人生をかめた作品である。そして私の見解では、まだ終わっていない。私は、ポール・ヴァレリーがかつて文学作品について書いたことに納得している。「作品とは決して完成しない。疲労、満足、引き渡す必要、または死、というような、何らかの偶然の出来事によらない限りは。誰が、何が、創作しているかに関係して、作品は一連の内面の変容の一ステージというだけなのである。」)

実際は、一度はこの物語は出版され、読者に「引き渡した」ともいえるのであり、それを書き直す行為を、読者としては寛容に受け止めるべきではないのかもしれない。それでも、なお「引き渡した」とは考えられず、未完と感じ、30年後に改訂をした作家の決断を、「読者の私」も「騙された」とは思わずに受け入れたい。

かつて恐ろしいほどの孤独の中で、同性愛者の自分について理解させてくれるような本を求めてかなえられなかった少年は、詩を書くことに自分の唯一の声をあげる場を見出し、詩人の中に同じような感情を謳う人々を見つける。やがて、自分の現実や大望を反映してくれないどころか、それとはまったくかけ離れたところにあ

る、ゲイ小説の描写や内容に失望する青年時代を過ごし、社会人となってからは、さらに、たとえ完璧な自分自身の投影ではなくても、何がしか類似している自分を示してくれる本を見つけては自身の人生の正当化を求めて生きていく力を得ようとする。その過程で、自らの夢と願望を正当化させてくれるような本の主人公にも出会い、その正当化させてくれた同性愛者の探偵が活躍する本と、同性愛と彼には読めてしまう関係性を示す探偵が活躍する本、から影響を大きく受けて、自身の最初の本を創作、14歳の時の自分が読みたかったような、そして、他の人が生きるのが楽になるような物語を創作し得たことを、戸惑い苦しむ14歳の自分自身に教えてあげたいと願う。ナーヴァもまた本と真摯に向き合って「虚構の真理性」をひたむきに求めてきた読者であり、読者にとっての虚構世界がどれだけ重要なのかは分かっている。「虚構の真理性」を、多くの読者が分有した、その大切な虚構世界を、書き直してしまう行為と、同時に、読者に重要な「虚構の真理性」を永遠性とともを持ち得る虚構世界だからこそ、未完と思える限りにおいて書き直すという行為、この二つの重みを受け止めて、強い覚悟で改訂版に臨んだと考えていいだろう。その物語が「虚構の真理性」を裏切りなく提示し得たのかについては、シリーズを愛した、同じ30年間という社会の変化を生きてきた読者に、そして永遠性についても、2016年度以降シリーズに遭遇する新しい読者も含めて、読者に全てを委ねるしかないのである。「だからこそ」改訂をしたということでもあろう²⁷⁾。

一作目の発行時から30年経って、LGBTに対しての社会の意識自体は、前よりは肯定的なものへと変化をしているといえよう。それでも、社会が少数派に対して平等であるといえるには程遠い状況なのである。同じ時代、1980年代を舞台にしながら、そうした社会の構造的不正義に向ける怒り、弱者の側へ立つ視線、それは強まりこそすれ、弱くはならない。それゆえ2016年度版で表現されていたことを、

²⁷⁾ シリーズを愛した「読者の私」は1986年度版のままでよかったのにと感じていることは否定できないし、シリーズが終了している以上、私のような読者が少なからず存在することをナーヴァが想定していなかったとも思えない。シリーズの読者だった者は、いわば、ヤウスのいったような「期待の地平」に再度向き合うことを（それが可能だとしても）要求されたわけであり、読書行為はとても不自然なものとなる。こうしたことが分かっているにもかかわらず改訂することは作家には意味があったということである。ナーヴァは、これからシリーズを読む読者のために、つまり作品の「永遠性」のために改訂をしたのだろう。

前節までに記したような作家の挑戦的な姿勢とともに私は高く評価したいと感じている²⁸⁾。だから、今、私の本棚には、これまでの7作と今回の改訂版が仲良く並んでいる。私もまた「本棚の本」が私自身を示すものとなればいい。そう思って本と向き合う読者であり続けたいし、学生にもまたそうあってほしいと考えている。本を選び読む行為から異文化コミュニケーションの教育はすでに始まっているといえよう。本そのものに、それだけの価値があるのである。

²⁸⁾ 正確にいえば、この「私」は読者としてではなく、「異文化コミュニケーション教育を専門とする私」である。2016年版は1986年度版と同じ時代、社会、そして事件を描いているのに、不正義を起こす社会構造そのものへの怒りが強められている感じを与える。同性愛ということだけを取りあげれば権利が拡大しているといえる米国社会の30年間の変化を考えると、むしろ逆である方が理解できる。本稿中に述べたように、プロットの変更による登場人物の人間関係が、自然と不正義について語る会話を増やす結果になったことが理由としては考えられる。ただ、「後書き」にも、同性愛者への社会の偏見だけではなく、弁護士として彼が経験した、社会的弱者が正義を得ると信じられている司法の場においても社会の構造的不正義を被る模様が描かれており、作者の不正義に向ける意識は極めて高い。シリーズを通して、主人公ヘンリーが弁護士としての仕事において社会の不正義と「闘う」こと、そして、この2016年度版の性的描写の明示とをあわせて考える時、一般的な「ノワール」の領域からこのシリーズ自体がすでに外れているともいえよう。この逸脱については、次の機会を待って考察をしたいと考えている。

認知意味論—人間的自然の哲学

青 木 克 仁

Abstract

この論考では、進化論的視座から言語理論を鍛えようとする時、どうしても混入してしまう「人間中心主義」を排すると同時に、精神分析の知見を抛り所にして、人間の優位性ではなく、むしろ欠陥に焦点をあて、その欠陥性ゆえに、言語習得が可能となったということを、認知意味論の知見をも交えながら論じていく。

序 論

進化論を基盤にして、人間性を解明する、という方法が哲学の世界にも入り込んできて、今や主流の座に座ろうとしている。ただし、こうした方法論の中にも、所謂「人間中心主義」的見方が混入してしまい、「人間こそが進化の頂点」である、という先入観を生み出している。「人間とは何か」という問いにアプローチする際に、「人間」を「動物」との差異によって位置付けようとする時、「動物」との対比によって「人間」には、人間性の優位を示す諸々の形容詞群があてがわれることになる。例えば、「知的」、「理性的」、「合理的」、「倫理的」などといった形容詞は、劣位に位置付けられる動物を通してなされてきた。アリストテレスの「理性的動物」といった定義付けにも、こうした傾向が如実に表れている。進化論の人間中心主義版においては、劣位に置かれる「動物」から、進化した結果、「理性的」と形容し得る諸能力を身につけたのだ、とされる。

けれども、こうした「人間中心主義的」傾向性に対して、精神分析の伝統においては、人間は「本能の壊れた動物」と位置付けられることで、脱-人間中心的な方向に思索の道を開くことになった。本論考では、認知意味論に見られる脱-人間中心的な方向性を考察しようと思う。それによって、認知意味論が取り入れている進化論的な見方から、「人間中心主義」を取り除こう。具体的に言えば、猿から類人

猿、そして人間へと進化する流れの中で「人間の言語」が如何に進化してきたのか、という、疑問視されることがなかった見方から、「人間中心主義」を払拭してしまうことから始めよう。本論考では、この「本能が壊れた動物」であるという人間特有の欠陥が、言語習得の鍵を握ることを論証していく。

第一節 チンパンジー達の苦闘

スー・サヴェジ＝ランボーは、チンパンジーを使って、簡単な統語関係を教える実験を行った。彼女は、チンパンジー用の「単語記号（レクシグラム）」のキーボードが使用される。レクシグラムは、そのレファレントとは、アイコニックではない、抽象的ではあるが簡単な形が選ばれた。これは、簡単な動詞と名詞を組み合わせる訓練で、動詞二つと名詞四つのレクシグラムを使い、チンパンジーは、例えば、「Give banana」を意味する語順でレクシグラムのキーを押さねばならなかった。

先ず幾つかの組み合わせを個別に教えていく。組合せ訓練ができた後、別々に学習した全ての組み合わせを選択肢として提示した。レクシグラムの関連性をチンパンジーに読み取らせようという意図の下、実験を開始してみると、チンパンジーは学習したばかりの組み合わせに執着したり、多くのレクシグラムのキーを叩いたりして、それまでの訓練が全く役に立たない結果となった。個別の連合は学習し得ても、連合全体の関係性を読み取ることはできなかったのだ。実験者は、してはならない行動をチンパンジーが示すと直ちにそれを罰するなどして、何が規則に反するのかを根気よく学習させていった。こうして、チンパンジー達は、少数のレクシグラムならば、間違った連合を排除し得るようになっていった。

実験者は、レクシグラム間の関連性を実際に習得したかどうかをテストするために、新しく名詞として食物項目を示すレクシグラムを追加し、チンパンジー達を試すことにした。チンパンジー達は、レクシグラムの組み合わせには困難を示したが、最終的には記号的にレクシグラムを使用し得るようになった。チンパンジーは、レクシグラムとそのレファレントである食物とのインデクシカルな関係を連合させる段階から、そのインデクシカルな関係がレクシグラム同士のインデクシカルな関係に従属していることを発見し得たのである。

この実験の後、スー・サヴェジ＝ランボーは、食物類は、食物類専用のトレイに、道具類は、道具類専用のトレイに、入れていく分類学習を、3頭のチンパンジー、シャーマン、オースチン、ラナに対して行った。3頭が課題をクリアできるようになると、新しい食物類や道具類が与えられる。3頭は新しい食物類も道具類も分類できるようになった。

こうして、食物類と道具類の二つのトレイへのインデクシカルな連合が、このように完成したところで、今度は、トレイに代わって、「食物」を表すレクシグラムと「道具」を表すレクシグラムをそれぞれ用意し、以前のトレイへの連合をレクシグラムへ転移学習させようと試みた。その結果、既に先の実験を通してレクシグラムでの訓練ができていたシャーマンとオースチンはこの課題を達成したが、ラナは、新しいレクシグラムへの転移を行うことができなかった。なぜならば、シャーマンとオースチンは記号間の関係を見て取るだけで済んだが、ラナは暗記学習に頼らざるを得ず、一々具体的な食物や道具を暗記学習に頼ってレクシグラムに連合していかなばならなかった。

ラナと他のチンパンジー達との比較を通して看取し得る現象として興味深いことは、普通の連合学習が記号学習を妨害する要因として働いているということである。一般化して言えば、記号学習が完成されるためには、インデクシカルな連合は障害として作用するということだ。

語と対象とのインデクシカル・レファレンスは、記号レファレンスへの移行の中で維持されるが、それはもはや語と対象の間のいかなる物的な相関によっても決定されないし、それに依存することもない。これは、ラカン風に言えば、「物の殺害」に当たるわけで、対象の不在をも代替し得る形で記号レファレンスが確立する。ここにきて、記号レファレンスは「差異の体系」として完成する。

連合的予測から記号的予測への転換には、再符号化という記憶の方略の転機があった。こうして、「差異の体系」としての言語を習得した時、人は一つの連合を別の仕方でも知っているということになる。即ち、ボトム・アップにインデクシカルに知っており、トップ・ダウンに記号的にも知っているということになる。この再符号化は、個別の項目ではなく、高次の関係性に基づいているため、(対象ではな

く、対象の関係付けを符号化する) 記憶への負荷を大幅に軽減する。

シャーマンとオースチンが最初に獲得したレキシグラムと対象間のインデクシカルな連合と新たに習得した記号レファレンスの間には葛藤が起きることだろう。この葛藤を解消するためには以前の連合を少なくとも一部は消去しなくてはならないのだ。こうして、記号は世界の事物のただの写像ではなく、互いの関係を表すようになる。

一旦、シンボリック・レファレンスが確立すると、メルロ＝ポンティ風に言えば、「遠心的意味」という形で、「差異の体系」の恩恵を受けることになるだろう。しかし、世界と身体との相互作用によって生み出された「求心的意味」というボトム・アップの方向性を忘却してはならないし、それはイメージ・スキーマという形で痕跡を残すことになるだろう。

第二節 ハンプリーの洞察

心理学者のニコラス・ハンプリーは『喪失と獲得』の中で、3万年前に描かれたと推定されている洞窟絵画が自閉症の少女の描く絵画と類似点がある、ということに着目している。彼の指摘している類似点とは、両者とも写真的正確さと認知的な偏りという点が見受けられるということである。この類似点から、ハンプリーは類比による議論を展開する。彼はまず、自閉症の少女が、或る程度、言語を獲得したその途端に、彼女の写真的な描写能力が喪失してしまったという事実を指摘する。そうした上で、約1万年前の氷河期の終わり頃に、洞窟絵画時代の描写力を喪失してしまったこととこの少女のケースに類似性を見るのである。ここから結論を導き出し、人類も言語能力の習得とともに、一旦、写真的な描写力を喪失するに至ったとするのである。実際に、この時期の絵画は、洞窟絵画時代のものと比べると、描写力という点では凡庸なものが多いという。

この類比による議論の結論を受けて、ハンプリーは仮説を立てる。すなわち、人類にはまず、写真的な記憶力が進化し備わっていたが、これが言語の発達によって、新たな抽象化の能力を手にした途端、写真的な描写力は、言語能力に道を譲ることになる、というのだ。確かに、写真的な描写能力は、アイコニック・レファレンス

の段階に足止めをさせてしまう要因になるだろう。メルロ＝ポンティ風に言い換えれば、「癒合的形態」への足止めということになる。また、ラカン的な「物の殺害」を経た象徴界への参入を妨げる要因ともなる。「物の不在」ということが、インデクシカル・レファレンスからシンボリック・レファレンスへの移行の結果であり、「差異の体系」としての言語を成立させたのだからだ。

描写能力が写真的なものに近ければ近いほど、その心的世界において、アイコニックな関係を離れて、自由に想像力を発揮し、フィクショナルな世界を形成する力が、その自由度を奪われることになるだろう。現生人類の子どもの場合、ネオテニーという状態で生誕するため、神経系の未熟さが幸いし、写真的な描写力を持たず、四足の動物を全て「ワンワン」と呼ぶといったように、一般的なイメージが先行し、その後で特殊へ移行していく。この神経系の未熟さゆえに、一般的なイメージが先行せざるを得ないというハンディが存在するがゆえに、学習の際に、「典型性」から入るという方法は、人間の場合、却って救いとなる。

イメージの細部に拘泥してしまうようなことがあれば、サヴェジ＝ランボーの類人猿の事例が示唆しているように、アイコニック・レファレンスの段階を超えることすら困難となってしまうだろう。勿論、猿たちの場合は、目の前に生き生きと現前している個々の事物に拘泥してしまうがゆえに、シンボリックな領域への飛躍が妨げられてしまう。同様に、写真的と呼び得るような優れた描写力は、現前している個々の事物との間に自ずと築かれてしまう細部に渡る関係性から離れられなくさせてしまうことだろう。

子どもは、およそ18ヶ月頃から、部分的な規則を形成し、それを様々な文章の中で使うようになる。「言語の臨界期」がいつまでなのかに関して定説は存在していないが、子どもが言語を爆発的に習得する時期があるということは確かである。一定の時期を過ぎてしまうと、大人が第二言語の習得に困難を覚えるように、子どもでも母語の習得が難しくなるとされている。すると、この時期に子どもの神経回路に「言語獲得装置 (LAD: Language acquisition device)」が開かれ、そして閉ざされてしまうと考えることができるだろう。

第三節 コネクショニズム

コネクショニズムの出現とともに心理的な現象が、神経のネットワークと関連付けられて説明されるようになった。そのお陰で、心理的なものはブラックボックス行き、という時代は終焉を向かえた。

ジェフ・エルマンは、時間系列を学習できる、「エルマン・ネット」と呼ばれるようになるニューロ・コンピューターを使って、人間の神経回路が如何に物事を学習するのかについてのシミュレーションを行った。彼は、短期記憶に類似した機構を再現するために、再帰ネットと呼ばれる工夫を考案した。再帰ネットでは、現在進行中の情報処理の段階で、「隠れ素子」と呼ばれる個所に蓄えられた「過去の状態」を、再入力できるような、まさに「再帰的な」ネットを組み入れた。彼の再帰ネットでは、蓄えられた過去の状態を、将来の入力系列を予測するために再帰的に利用可能にしたわけで、エルマンは、これに統語学習課題をさせてみた。すると、十分に訓練したネットでは、文の一部のみが入力されるような不完全な情報が与えられた場合でも、どのような語が文法的に次に続き得るであろうかを予測し得るような文法の統計的構造を内蔵するに至った。与えられた情報を汎化し、そこから文法規則を取り出すのに十分な構造を、「エルマン・ネット」は、言わば経験から産出したのである。恐らく類推的に考えて、人間の神経ネットも、言語情報という刺激を汎化して、まさに「暗黙の文法規則」を、明文化されたコードとしてではなく、神経ネット上に分散したアナログなパターンという独特なコードとして、産出していると考えられる。

エルマンが神経系のシミュレーションである「エルマン・ネット」を使って明らかにしたように、入力された文の規則性はネット全体に冗長に表象され、弱いが一貫した構造を示すようになったのである。この学習過程においては、喩えてみるならば、「木を見て森を見ず」の逆が進行している。つまり、あたかも全体のぼけた画像が与えられ、その後、次第に解像の精度を高めていくのに似た過程で規則性が習得されていくのである。類推するに、子どもは、看取し得ない詳細に拘泥する機会を己の神経系の未熟さゆえに奪われるが、却ってそのお陰で記号間の組み合わせの上位パターンが浮き彫りにされていくのである。すると、子どもの学習限界が

却って言語学習にとっては有利に働くということが見えてくる。神経系の未熟さゆえに、細部に拘泥し得ない子どもであるからこそ、知らぬ内に少しずつ形成されていた「森」を見ることができるようになるのである。未熟な神経系を備えているがゆえ、写真的な描写力を持たず、個々の樹木に拘泥し得ない子どもは、或る日突如、記号間の上位パターンに見られる規則性を備えてしまうことになる。こうして、「差異の体系」である記号レファレンスを獲得した時には、確かに「物の殺害」つまり、インデクシカル・レファレンスの根底にある「アイコニック」なものへの執着は消え去っているといったことが起きているのである。

結 論

カントが「構想力（想像力）の遊び」と呼んでいる、人間特有な自由さを得るには、写真的、写實的な描写力に向けた進化は、むしろ障害となるだろう。あまりにも写實的過ぎる描写力によって、現前する個々の事物を固有のものとして捉えてしまうのならば、そこに相似性を見出したり、類比による議論の根幹にある領域間の類似性やメタファー的な領域間の飛躍を可能にする類似性を洞察したりすることが妨げられるからだ。そもそも上記のハンフリーの議論も、細部に拘泥したら、本質的な類似点を見失うことになるだろう。自閉症の少女と洞窟絵画を描くご先祖様との間には歴然とした違いが数多く存在するからだ。一旦、そうした違いに拘泥し始めたら、議論の本質をなす類似点への注視が妨げられてしまうことになるだろう。

「類比による議論」は、発想の原点になる類似性を洞察した上で、結論の導出の妨げにはならない多くの非類似点を無視することで初めて成立し得るからだ。するとこのように結論し得るのではないか。つまり、現生人類の神経系の未熟さというハンディは、却って人間のみが容易に達成し得るとされるシンボリックな領域への飛躍を助ける結果になったのだ、と。

そもそも、「構想力（想像力）の遊び」が何故可能になるのだろうか。私達は、イメージを心的に操作し得る。イメージの如何なる性質が操作可能性をもたらすのだろうか考えてみよう。イメージの性質としては、例えば、現前する対象が不在となっても、心的イメージとして心には残るということが挙げられよう。フッサール

の有名な文章に擬えて言うなら、たとえ現実の桜が燃えてしまったとしても、桜の心的イメージは心に残る、のである。しかも、心的イメージは質感を持つ。イメージは質感をもたらし、情動とも不可分な関係を持つようになる。また、心的イメージは、対象が不在になっても存在し得ることから分かるように、対象との間に距離を打ち立てる。この距離のお陰で、心的イメージは、対象の实在から離れて、心的に操作し得るものとして存在し得るのである。これこそが、イメージの象徴化機能と呼ぶべき事態なのである。経験に含まれる現実的な基礎としてイメージの機能が存在していることを私達は忘れてしまいがちだ。しかし、ネオテニーの宿命を負う未熟な神経系を備えた人間の身体性は、その未熟さゆえに、「構想力（想像力）」の遊びを享受し得る不可思議かつ豊かな存在になり得たのである。

引用及び参考文献（引用頁は本論中に記す）

- ヴァレラ, トンプソン, ロッシュ, 2001, 『身体化された心』, 田中靖夫訳, 工作舎.
 ウィトゲンシュタイン, 1975, 「論理哲学論考」, 『ウィトゲンシュタイン全集1』
 より, 奥雅博訳, 大修館書店.
 エーデルマン, 1995, 『脳から心へ』, 金子隆芳訳, 新曜社.
 エルマン, バイツ, ジョンソン他, 1998, 『認知発達と生得性』, 乾敏郎, 今井むつ
 み他訳, 共立出版.
 ガードナー, ハワード, 1987, 『認知革命』, 佐伯胖他監訳, 産業図書.
 カント, 1964, 『判断力批判（上）』, 篠田英雄訳, 岩波書店.
 ジョンソン, マーク, 1991, 『心のなかの身体』, 菅野盾樹訳, 紀伊国屋書店.
 ソシュール, 1940, 『一般言語学講義』, 小林英夫訳, 岩波書店.
 ダメット, 1998, 『分析哲学の起源』, 野本和幸訳, 勁草書房.
 チョムスキー, 『統辞構造論』, 福井直樹他訳, 岩波文庫.
 ディーコン, 1999, 『ヒトはいかにして人となったか』, 金子隆芳訳, 新曜社.
 ドーキンス, 1992, 「利己的な遺伝子と利己的な模伝子」 in 『マインズ・アイ（上）』,
 坂本百大監訳, TBS ブリタニカ.
 野矢茂樹, 2011, 『語りえぬものを語る』, 講談社.

- パース, C. S., 1994, 『記号学』, 内田種臣編訳, 勁草書房.
- ハンフリー, ニコラス, 2004, 『喪失と獲得』, 垂水雄二訳, 紀伊国屋書店.
- フッサール, 1968, 『論理学研究, 第1巻』, 立松弘孝訳, みすず書房.
- フッサール, 1970, 『論理学研究, 第2巻』, 立松弘孝訳, みすず書房.
- フッサール, 1975, 『経験と判断』, L. ランドグレーベ編, 長谷川宏訳, 河出書房.
- フッサール, 1984, 『イデーエン I-II』, 渡辺二郎訳, みすず書房.
- プラトン, 1967, 『ゴルギアス』, 加来彰俊訳, 岩波文庫.
- プラトン, 1967, 『パイドロス』, 藤沢令夫訳, 岩波文庫.
- プラトン, 1979, 『国家』上下巻, 藤沢令夫訳, 岩波文庫.
- 松沢哲朗, 1991, 『チンパンジーから見た世界』, 東京大学出版局.
- メルロ=ポンティ, 1964, 『行動の構造』, 滝浦静雄他訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1966, 『眼と精神』, 滝浦静雄, 木田元訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1967, 『知覚の現象学1』, 竹内芳郎他訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1969, 『シーニュ1』, 竹内芳郎監訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1974, 『知覚の現象学2』, 竹内芳郎他訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1979, 『世界の散文』, 滝浦静雄他訳, みすず書房.
- メルロ=ポンティ, 1989, 『見えるものと見えないもの』, 滝浦静雄, 木田元訳, みすず書房.
- モラン, エドガール, 1984, 『失われた範例』, 古田幸男訳, 法政大学出版局.
- ユクスキュル, 2005, 『生物から見た世界』, 岩波文庫.
- ラマチャンドラン, V. S., 1999, 『脳のなかの幽霊』, 山下篤子訳, 角川書店.
- リンデン, 2012, 『快樂回路』, 岩坂彰訳, 河出書房新社.
- レイコフ, ターナー, 1994, 『詩と真実』, 大堀俊夫訳, 紀伊国屋書店.
- レヴィ=ストロース, 1976, 『野生の思考』, 大橋保夫訳, みすず書房.

Goodman, N., 1965, *Fact, Fiction, and Forecast*, Indianapolis: Bobbs-Merrill.

Hempel, C.G., 1965, *Aspects of Scientific Explanation and Other Essays in the Philosophy of Science*, Glencoe: Free Press.

- Lakoff, George, 1986, "The Meanings of Literal" in *Metaphor and Symbolic Activity*, 1(4), pp.291-296.
- Lakoff, George, 1987, *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: Chicago Univ. Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M., 1999, *Philosophy In the Flesh*, New York: Basic Books.
- Plato, 1961, "Meno" tr. W.G. Gurthrie, in *The Collected Dialogue of Plato*, ed. E. Hamilinton & H. Cairns. pp.353-384.
- Popper, Karl, R., 1972, *Objective Knowledge*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Rosch, Eleanor, 1978, "Principles of Categorization" in *Cognition and Categorization*, ed. E. Rosch & B.B. Lloyd, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Varela, Francisco, J., Thompson, Evan, and Rosch, Eleanor, 1993, *The Embodied Mind*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

日英バイリンガル記事における Theme 選択の差異

三 宅 英 文

Abstract

This study analyzes similarities and differences in Thematic choices between inflight magazine articles in Japanese and their English translations. The investigation of the Thematic progressions of the Japanese texts shows that various entities are chosen from the material situational setting, the outside material situational setting, and generalized things and that they are arranged in rather tangled ways. On the other hand, the English translations have rather linear Thematic progressions even though they express almost the same contents. The same entity is used as an unmarked Theme of some successive clauses and the Theme shifts to another via reference to an entity in the previous Rheme.

Although Japanese and English have different Thematic progression patterns, when the common elements in Theme positions in both languages are investigated, there are some tendencies in how they were chosen. The most typical pattern is when the topical Themes indicated by *wa* in Japanese are chosen as unmarked Themes in English translations. When a target Japanese clause is a clause complex, the last clause's topical Theme is apt to be chosen as the unmarked Theme in English. When a Japanese topical Theme includes an embedded modifying clause, the clause tends to be translated into a separate independent clause. In this case, the unmarked Theme in English translation can be chosen arbitrarily so that it shows a strong connection with the following clauses.

1. 研究目的

今日、選択体系機能文法はさまざまな言語の分析に応用されている。対人機能、経験機能、テキスト形成機能という共通の側面から言語分析を行うため、デリカシーの差異こそあれ、異なった言語間であっても共通点と相違点を比較することが可能である。

本研究では、テキスト形成機能の一部である Theme に注目して、日本語と英語のテキスト展開の差異を明らかにするために日本語とその英語訳に用いられている Theme-Rheme 構造を分析する。両言語における Thematic progression の差異を調査する中で、日本語から英語への翻訳の際にどのような要素が同じ Theme として選択されやすいのか、どのような場合に Theme 選択の差異が生じるのかについて考察する。

2. 研究の枠組み

2.1 英語の Theme の特定

選択体系機能文法では、一つの節の中で経験機能、対人機能、テキスト形成機能の3つのメタ機能が同時に具現化されていると考えている。Theme とは、テキスト形成機能において、情報構造 (information structure) とともにテキストの結束性を支える要素である。Thompson は Theme の果たす役割を以下のようにまとめている。

- Signalling the maintenance or progression of ‘what the text is about’ at that point. ...
- Specifying or changing the framework for the interpretation of the following clause (or clauses) ...
- Signalling the boundaries of sections in the text. ...
- Signalling what the speaker thinks is a viable/useful/important starting point. ...

(Thompson, 2004: 165)

Thompson は Theme を “the first constituent of the clause” (Thompson, 2004: 143) と定義している。Theme は節の最初に現れる Experiential な意味を表す構成素までの範囲を指すが、節頭に現れる Experiential な意味を表す典型的な構成素は mood によって決まっている。平叙文では Subject, Wh-疑問文では Wh-word group, Yes-No 疑問文では Finite + Subject, 命令文では process, 感嘆文では Wh-あるいは How-word group がそれぞれの mood の unmarked Theme となる。

しかし、これらの構成素を超えて節頭に現れる要素も存在する。そのような構成素は marked Theme と呼ばれている。Marked Theme となる最も典型的な要素は、時

や場所を示す Adjunct である。

節複合の場合、 β 節（従属節）が α 節（主節）の前に来るか、後ろに来るかによって Theme が異なる。 β 節が α 節の後に来る場合、 α 節の Theme が節複合全体の Theme となる。それに対し、 β 節が α 節の前にある場合、 β 節全体が節複合全体の Theme となる。

As the universe expanded, One second after the big bang,	the temperature of the radiation decreased. it would have fallen to about ten thousand million degrees.
Theme	Rheme

(Thompson, 2004: 155)

しかし、全ての節は Theme-Rheme 構造を持つため、 β 節の中の Theme-Rheme 構造を特定することも可能である。

As the universe	expanded,	the temperature of the radiation	decreased.
Theme ¹		Rheme ¹	
Theme ²	Rheme ²	Theme ³	Rheme ³

(Thompson, 2004: 155)

Thompson (2004), Eggins (2004), Halliday (2014) らの分析では、marked Theme が存在する場合、unmarked Theme は Theme 構造から除外している。しかし、本研究においては、unmarked Theme は marked Theme の存在の有無に関わらず存在するものとする。そのため、 β 節が α 節の前にある場合には β 節全体が marked Theme、 α 節の Subject が unmarked Theme となる。

As the universe expanded,	the temperature of the radiation	decreased.
β	α	
Marked Theme	Unmarked Theme	Rheme

2.2 日本語の Theme の特定

選択体系機能文法を用いた日本語の分析は、龍城 (2000, 2004), 塚田 (2001), Teruya (2006) らによって盛んに行われている。本論では、日本語の Theme-Rheme 構造を分析する際、主に Teruya (2006) の分析方法に従うことにする。

日本語の Theme を特定するに当たり、Teruya は “clause-initial position holds textual significance (Teruya, 2006: 71)” と述べ、日本語の Theme も節頭の構成素と定義している。日本語の場合、英語と違って、助詞「は」が明示的な Theme のマーカーとなるのだが、選択体系機能文法の枠組みでは「は」が接続する以外の要素であっても節頭にある構成素は全て Theme に含める。そのため、Experiential Theme の topical Theme が現れるまでの Textual および Interpersonal の意味を表す構成素の全てが Theme に含まれることになる。

Experiential Theme に関して、Teruya (2006: 81-82) は、Experiential Theme には節の展開に必要不可欠な要素である topical Theme と節の構成上は必ずしも必要な要素ではない circumstantial Theme が含まれるとしている。Topical Theme は、Rheme で示される動作や状態の主体となる要素で、participant として具現化される構成素である。

「象は鼻が長い」という節では、「象は」の部分が topical Theme となる。しかし、topical Theme は必ず「は」で表されるという訳ではなく、「が」や「も」によって示されることもある。そのため、「私もその意見に賛成です。」という節では、「私も」の部分が topical Theme となる。ただし、「象は鼻が長い」のように「は」で示される動作や状態の主体が「が」で示される要素に先行する場合には、「は」で示される要素までが topical Theme と見なされる。

それに対して、circumstantial Theme は場所や時、情報源を表す Adjunct である。これらの時や場所を表す要素が topical Theme の前にある場合、circumstantial Theme と判断される。たとえば、「100 メートルくらい先にコンビニがあります。」という節では「100 メートルくらい先に」という構成素が topical Theme である「コンビニが」に先行するため、circumstantial Theme と判断され、節全体では「100 メートルくらい先にコンビニが」までが Theme を構成することになる。

最初の topical Theme が現れるまでの Textual, Interpersonal な意味を表す構成素に

も注意が必要である。Textual Theme には、感嘆詞などの continuative や話者の論理展開を示す conjunction, それ以外の節の論理的接続のマーカーとなる conjunctive Adjunct が含まれる。一方, Interpersonal Theme には, vocative や話者の評価を示す modal comment Adjunct が含まれる。

驚いたことに,	ダンスの中で	猫が	子どもを産んでいた。
Interpersonal	Experiential	Experiential	Rheme
Adjunct	circumstantial	topical	
Theme			

また, 最初の topical Theme の後でも, 「は」によって Theme が明示される構成素がある場合にはその要素も Theme に加える。

悪いけど,	ぼくは	今日は	先に帰ります。
Interpersonal	Experiential	Experiential	Rheme
Adjunct	topical	circumstantial	
Theme			

以上のような節頭の Theme 構成要素とは別に, Teruya は「では」で示される absolute Theme の存在を指摘している。この「では」で表される要素は, ほとんどの場合, 節の最初に位置する。

予定表では	まず	会長が	挨拶することになっています
absolute Theme	Theme		Rheme
	Conjunctive Adjunct	topical	

日本語と英語の Theme を比較する際, 両言語の節複合の構造が与える影響も考慮しなければならない。日本語の場合, 英語ほど paratactic と hypotactic の節関係の区

別は簡単ではない。Teruya (2006: 332-3) の分類基準によれば, paratactic の関係にある節複合は, (1) それぞれの節において常体, 敬体の選択の余地があること, (2) 動詞の終止形か終助詞で終わり, 助詞を取り除いた際に独立した節となること, の二つの条件のいずれかを満たす。それ以外の節は hypotactic に分類される。β 節に含まれる節には, 動詞が「時」や「間」といった head となる名詞を修飾する形式や, event の生じる時を α 節の示す時制に依存するような節が含まれる。たとえば, 理由を表す「から」や「ので」で示される節は, 「～したから (の)」 「～するから (の)」のようにその節自体が時制を示すことが可能であるため, paratactic の関係に分類される。理由を表す副詞節でありながら β 節とはならないのである。それに対し, 「試験に合格したら」のような節は, それに続く α 節の「大学に行っていた」や「大学に行く」によって時制が示されるまで event が過去に生じたものか, 未来に生じるものか不明である。このような節は β 節と見なされる。

節複合の関係が paratactic である場合, 英語も日本語もそれぞれの節が独立した Theme を持つ。一方, 節複合の関係が hypotactic である場合, 英語と違って日本語は常に β 節が α 節に先行する。β 節の位置には選択の余地がないため, Theme の選択が問題となるのは β 節の Theme の部分のみとなる。そこで, 本論で分析を行う際には, この日本語の特性に合わせ, 英語の β 節全体を marked Theme として扱うのではなく, β 節の Theme (Theme²) のみに焦点を当てながら比較を行うことにする。

また, 本論で日本語を分析する際, 大筋では Teruya (2006) の Theme の区分に従うが, 「は」で示される要素の後で述部と呼応する doer となる要素が「が」で表される場合, それを subjective Theme として取り扱うこととする。たとえば, 「今日, 彼女は機嫌が悪い。」という節であれば, 「今日」が circumstantial Theme, 「彼女」はが topical Theme, 「機嫌が」が subjective Theme と考える。これは, 英語の平叙文の典型的な unmarked Theme が Subject であるため, subjective Theme を設定することで日本語の topical Theme と subjective Theme のどちらが英語の unmarked Theme と強い呼応関係にあるのかを調べることができるからである。

彼女は	機嫌が	悪い。
車代は	私が	払います。
topical Theme	subjective Theme	Rheme

更に、日本語の場合、「伝達の単位 (communicative unit)」(龍城, 2004: 5) の中で明示されない「覆面テーマ (veiled Theme)」(龍城, 2004: 6) が存在することが指摘されている。本論では、明示されない覆面テーマも復元してそれぞれの節の Theme として捉えることとする。

3. 研究方法と分析データ

本研究の分析対象となるのは、全日本航空機内で無料配付されている『翼の王国』のバイリンガル記事である。この冊子の中で扱われている紀行文を取り上げ、同じ内容を扱う日本文とその英語訳の Theme 選択の類似性や差異がどのような文脈において生じるのかを分析する。

『翼の王国』は月刊誌で、日本語の記事とその英語訳、中国語訳を読むことができる。記事の内容は、紙面によるスペースの影響を受けるものの、日本語も英語訳もほぼ同一と考えて良いだろう。本論では、この雑誌の 2019 年 9 月号の中から広島のお好み焼き店のレポート記事を取り上げることとした。当該雑誌の記事は 4 つのお好み焼き店の取材で構成されているが、本論では最も Theme 選択の差異が激しい「ふたごや」の紹介文を中心に分析を行い、必要に応じて他の記事にも言及することとする。

4. データと分析

4.1 「ふたごや」の記事

「ふたごや」の記事の日本語と英語訳のテキストを経験的な意味が共通する節で区切ると、表 1 のように表すことができる。表中の実線の区切りは段落を、その中の破線は日本語の節とそれに対応する英語の節の区切りを示している。隣接する枠がそれぞれの言語の共通の意味の区切りとなっているのである。

それぞれの節には記号を付け、Paratactic な関係にある節複合は 1, 2 で, hypotactic な関係にある節複合は α , β で示してある。// は paratactic な関係にある節の境界を, / は hypotactic な関係にある節の境界を示している。[[]] は挿入節で, 下のランクにある節である。日本語のテキストに覆面テーマや省略テーマがある場合は () で復元し, 日本語の circumstantial Theme (CT) および英語の marked Theme となる β 節内の unmarked Theme (MT-UT) は波線で, 日本語の topical Theme (TT), Subjective Theme (ST), および英語の unmarked Theme (UT) の部分は下線で, 日本語に特有の absolute Theme (AT) は二重線で示した。

表 1. 「ふたごや」の日英テキスト

段落	日本語テキスト	英語訳テキスト
1	(1β) AT <u>目の前では</u>, TT [[見分けがつかないくらい, ほぼ同じ]]<u>顔の美女ふたりが並んで</u> // (1α) お好み焼きを焼いてくれている。 (2β1) (TT <u>彼女たちは</u>) ST <u>笑うタイミングもほぼ同じ</u>, // (2β2) ST [[「どうぞー」と//かけてくれる]]<u>声までシンクロしていて</u>, / (2α) (TT <u>私たちは</u>) 不思議な世界に入り込んでしまったように思う。 (3) TT <u>ここ『ふたごや』は</u>, [[父, 母, 1 章衣さんと祥衣さんの双子姉妹が営む]]<u>お好み焼き屋</u>。 (4β) (TT <u>『ふたごや』は</u>) [[コンビニよりもお好み焼き屋が多いという]]<u>海田町で店を始めて</u> / (4α) 8 年	(1α) UT <u>Two beautiful women</u>, <(1β) whose faces I could barely tell apart,> were cooking our okonomiyaki in front of us. (2-1) UT <u>They</u> moved together, (2-2) smiled together, (2-3β) and when MT-UT <u>they</u> served our food (2-3α1) UT <u>they</u> even said (2-3α2) “Here you go” in chorus. (3α) UT <u>We</u> felt like (3β) we had stumbled into some mysterious other world. (4) UT <u>But we</u> were actually in Futagoya, an okonomiyaki restaurant [[run by twin sisters Akie and Sachie with their parents]]. (5-1) UT <u>It</u> opened eight years ago in the town of Kaita, (5-2) which is said to have more okonomiyaki restaurants than

	になる。	convenience stores.
2	(5-1) CT <u>[[広島に数多くある]]</u>ソースの中でも, TT <u>お父さんは</u>, <u>[[甘さ控えめでフルーティーな「ミツワソース」を使った]]</u>お好み焼きが好きだったそうで, // (5-2β) TT <u>[[近所にあった]]</u> <u>[[「ミツワソース」を使った]]</u> <u>お店</u>がなくなり, / (5-2α) (TT <u>お父さんは</u>) <u>開店を決意した</u>そうだ。	(6-1) UT <u>There are</u> plenty of sauces <u>[[to choose from]]</u> in Hiroshima, (6-2) UT <u>but Akie and Sachie's father</u> was always partial to the fruity and lightly sweetened Mitsuwa Sauce. (7β) When MT-UT <u>the only local</u> <u>okonomiyaki restaurant</u> <u>[[that used this sauce]]</u> closed down, (7αα) UT <u>he</u> decided (7αβ) to open his own.
3	(6) AT <u>広島では</u>, TT <u>[[ぎゅっと押さえつけるように焼く]]</u>のがお好み焼きの昔からのスタイルだそう。 (7-1) TT <u>お父さん</u>曰く, // (7-2) TT <u>[[最初に食べておいしいなあと思う]]</u>味は, 飽きがくる。// (7-3) TT <u>[[優しい味で, もう一枚食べたいと思う]]</u>のが, おいしいお好み焼き」なのだとか。 (8) TT <u>[[そのために大事な]]</u>のは, 食材の質。 (9-1) (TT <u>お父さんは</u>) キャベツも毎日, 甘さや水分量などをチェックしている / (9-2) という。 (10-1β) (TT <u>お父さんが</u>) おっしゃるとおり, / (10-1α) TT <u>[[ゆっくり, じっくり火が通った]]</u>キャベツは軟らか	(8) UT <u>Futagoya</u> follows the traditional Hiroshima style okonomiyaki cooking technique of applying pressure <u>[[as you go]]</u>. “(9-1) UT <u>Some okonomiyaki</u> taste good at first bite, (9-2) UT <u>but you</u> get tired of them later on,” // (9-3) says Akie and Sachie's father. “(10) UT <u>The key</u> is creating a mild flavor <u>[[that makes you want to have another]]</u>.” (11) UT <u>That's</u> why quality ingredients matter. (12-1) UT <u>He</u> checks the sweetness and water content of the cabbage every day, (12-2α) UT <u>and I</u> had to admit (12-2β) that his <u>[[slowly and carefully cooked]]</u> cabbage was soft and sweet. (13β) When I paired it with that aromatic

い甘さで、/(10-2) _{CT} <u>そこに</u> _{TT} <u>香り</u> <u>高い「ミツワソース」が絡んで、</u> / (10-3β) (_{TT} <u>私は</u>) 気づいたら / (10-3α1) 「もう一枚」と/(10-3α2) 頼 んでしまった。	Mitsuwa Sauce, (13αα) _{UT} I found / (13αβα) myself ordering another / (13αββ) before I even knew it.
--	--

4.2 分析

分析対象となっている日本語のテキストは3つの段落から構成されている。第一段落は(1)節から(4α)節まで、第二段落は(5-1)節から(5-3)節まで、第三段落は(6)節から(10-3α2)節までである。

第一段落の日英の Theme を比較してみると、表2からも明らかのように、英語訳において unmarked Theme として選択されているのは主に日本語の topical Theme であることが分かる。この topical Theme には、それまでの文脈から復元される覆面テーマや、述部から復元される省略されたテーマも含まれている。例外は(3)節の「ここ『ふたごや』は」という構成素で、topical Theme であるにも関わらず英語訳では Rheme の位置に置かれている。

表2. 第一段落における日本語の Theme と英語の unmarked Theme の相関関係

日本語テキストの Theme	英語テキストの Theme
(1β) _{AT} 目の前では _{TT} 美女ふたりが	(1α) _{UT} Two beautiful women
(2β1) _{TT} (彼女たちは：覆面テーマ) _{ST} 笑うタイミングも (2β1) _{ST} 声まで	(2-1) _{UT} They (two beautiful women) - (2-2) _{UT} (they) - (2-3β) _{UT} they -(2-3α1) _{UT} they
(2α) _{TT} (私たちは：省略テーマ)	(3α) _{UT} We
(3) _{TT} ここ『ふたごや』は	(4) _{UT} But we
(4α) _{TT} (『ふたごや』は：覆面テーマ)	(5-1) _{UT} It (Futagoya)

一方で、日本語テキストの absolute Theme や subjective Theme は、英語訳の際に Theme として選択されていない。(1 β)節における「目の前では」という absolute Theme は英語では Rheme の要素となっており、(2 β)節の subjective Theme である「笑うタイミングも」や「声まで」も英語訳では Rheme において “smiled together” や “said ... in chorus” のように process, participant, circumstance の組合せで表現されている。

これらの Theme の選択から導き出される特徴は、日本語のテキスト内に「は」で示される topical Theme が存在する場合には、英語訳においてもそれらの entity が unmarked Theme として選択され、subjective Theme として扱われている entity は Rheme 化するということである。同時に、英語の Theme の展開では、読者の急激な視点の変化を避ける傾向があるということが挙げられる。

日本語テキストの Thematic progression に従って読者の視点の変化を追っていくと、冒頭の absolute Theme である(1-1)「(私たちの) 目の前では」では書き手と店内の関係が読者の視点の出発点となっている。その後、読者の視線は(1)節および(2)節を通して「美女ふたり」に導かれる。その「美女ふたり」の描写には subjective Theme として「笑うタイミング」や「声」が含まれている。これらは、「美女ふたり」の部分への言及である。その後、書き手の感想を経由して読者の視線は(3)節において「ここ『ふたごや』は」という店全体に広げられる。読者は一つの段落の Theme 展開の中で、店全体、店員、店員の部分、著者、店全体のように次々と異なる人、モノについての描写を追っていくことになるのである。言い換えると、最初の (1 β) 「目の前では」や(3)「ここ『ふたごや』は」という Theme がこの段落の一番大きな枠組みを示しており、その物理的コンテキスト内にある entity は比較的自由的な順番で取り上げられているため、読者は「全体一部分」の関係から Theme の展開を追っていくようになっているのである。

それに対し、英語訳テキストではもっと直線的な Theme の配列がなされている。出だしの(1)節より(2-3)節に至るまで、 α 節および β 節における unmarked Theme は全て “two beautiful women” で統一されている。そのため、この間の読者の視点は一定である。次の(3)節では Theme が “we” に変化しているが、これは “two beautiful women” と同じ物理的コンテキスト内にいる著者である。(4)節では、(3)節の

unmarked Theme である “we” の視点を維持しつつ, Rheme において “Futagoya” という店名を導入している。その店名を, (5-1)節の unmarked Theme “It” として選択することで, 読者の視点を徐々に異なる対象に移行させるようになっているのである。

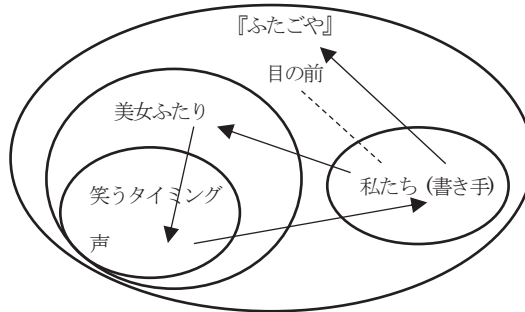


図 1. 日本語テキストの第一段落の Thematic Progression

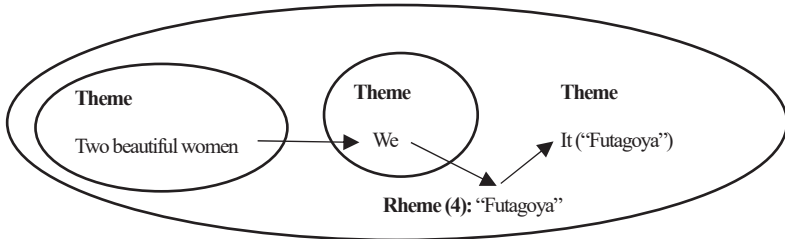


図 2. 英語訳テキストの第一段落の Thematic Progression

ここで注意したいのは, 日本語の absolute Theme もそこで扱われている entity が読者の急激な視点の変化を伴わない場合には英語訳の marked Theme として取り込まれる可能性があるということである。以下に示す例は同雑誌に掲載されている『ロペズ』の紹介文である。ここでは, 日本語テキスト(3)節の absolute Theme 「そう, ここ『ロペズ』では」が英語訳のテキストの(3)節においても “Yes: here at Lopez” のように marked Theme として取り込まれている。“Lopez” という店名は, 英語訳テキストの中でも既に(2)節において導入されているため, 読者にとっては旧情報となっているのである。そのため, (3)節の marked Theme として導入されても読者の急

激な視点の変化を生じさせることはない。このことから、日本語テキストの absolute Theme が英語訳テキストの Theme に取り込まれるかどうかは、旧情報化された entity について語られているかどうか重要であることが分かる。

表 3. 『ロペズ』の紹介テキスト

日本語テキスト	英語訳テキスト
(2-1β)店名の『ロペズ』は元・広島東洋カープのロペス選手由来かと / (2-1α)思いきや、// (2-2)なんと（それは）店主のお名前。	(2-1α) At first we thought (2-1β) the restaurant might be named after Luis Lopez, former Hiroshima Toyo Carp's baseball player, (2-2α) but it turns out (2-2β) it's the name of the shop owner himself.
(3) <u>AT</u> <u>そう、ここ『ロペズ』では、</u> <u>TT</u> <u>グアテマラ人のフェルナンド・ロペズさん</u> <u>が鉄板の前に立つ。</u>	(3) Yes: <u>here at Lopez, a Guatemalan man called Fernando Lopez</u> stands behind the griddle.

『ふたごや』の第二段落では、日本語も英語もおよそ同じ entity を Theme として取り上げている。日本語テキストにおいて、(5-1)節の「お父さんは」、(5-2β)節の「近所にあったミツワソースを使ったお店」、(5-2α)節の覆面テーマである「お父さんは」はそれぞれの節の topical Theme であるが、これらの構成素は英語訳においても (6-2) “but Akie and Aschie’s father”, (7β) the only local okonomiyaki restaurant, (7αα) “he” という unmarked Theme に置き換えられている。やはり、日本語の topical Theme は英語訳の際に unmarked Theme として取り入れられることが多いことが分かる。

興味深いのは、日本語テキストの(5-1)節の circumstantial Theme に対応する英語訳の(6-1) There are plenty sauces to choose from in Hiroshima. である。この部分は、日本語テキストでは「広島に数多くあるソースの中でも」のように circumstantial Theme の中にランクシフトした挿入節を組み込むことで「お父さん」と「ソース」の関係を表しているのだが、英語訳テキストにおいてはランキングの節を二つ並べることで同じような視線の流れを作り出している。

表 4. 第二段落における日本語の Theme と英語の unmarked Theme の相関関係

日本語テキストの Theme	英語テキストの Theme
(5-1) CT <u>広島に数多くあるソースの中で</u> も, TT お父さんは	(6-1) UT There are (6-2) UT but Akie and Sachie's father
(5-2β) TT 近所にあった「ミツワソース」 を使ったお店が	(7β) MT-UT the only local okonomiyaki restaurant that used this sauce
(5-2α) TT (お父さんは)	(7αα) UT he

日本語テキスト(5-1)節の *circumstantial Theme* の話題の中心は「ソース」であるが、英語訳テキストではそれまで “sauces” は話題に上っていない。“Sauces” は読者にとっては新情報である。そのため、その *entity* をそのまま Theme に取り入れてしまうと、それまでのテキスト展開の視点を急激に変えてしまうことになる。そこで(6-1)節を設け、“sauces” を新情報として Rheme に導入することで急激な変化を抑えているのではないかと考えられる。英語訳テキストの *unmarked Theme* である “There are” は、経験的な意味は「存在」以外ほぼ何も表さない構成素である。英語の(6-1)節全体に日本語の(5-1)節の *circumstantial Theme* の役割を担わせることで、日本語とよく似た形式で読者の視点を移動させることが可能となっているのである。

第三段落の日本語テキストの特徴は、出だしの(6)節の *absolute Theme* が話題をその直前の(5-2α)「(お父さんは)」から突然「広島」の地域全体に広げていることと、この段落で選択されている *topical Theme* が、(6)「ぎゅっと押さえつけるように焼くのが」、(7-2)「最初に食べておいしいなあ気づく味は」、(7-3)「優しい味で、もう一枚食べたいと思うのが」、(8)「そのために大事なものは」といった抽象的な *participant* の連続になっているということである。

この流れは、(9-1)節において変化する。(9-1)節において省略テーマである「(お父さんは)」が *topical Theme* として導入されると、その後は(10-1α)「ゆっくり、じっくり火が通ったキャベツは」、(10-2)「香り高い「ミツワソース」が」、(10-3)「(私は)」といった店内の具象である *entity* が *topical Theme* として選択されるようにな

る。これらは、これまで同様、同じ物理的コンテキスト内に存在する **entity** であり、読者は節ごとに店内の違う **entity** に視線を向けるように誘導されているのである。

この段落の英語訳テキストを見てみると、日本語テキストの出だしの(6)「広島では」という **absolute Theme** や同節の **topical Theme** となっている「ぎゅっと押さえつけるように焼くのは、英語訳では(8)節の **Rheme** の位置で扱われている。その代わり、(8)節の **unmarked Theme** には前節の **Rheme** で(7αβ) “his own” として言及されている店名、Futagoya が選択されている。ここでも、英語訳テキストでは前節の **Rheme** の要素を **unmarked Theme** として利用することで、情報の直線的な展開を作り出すようにしていることが分かる。



図 3. Linear Theme Pattern

次に、日本語テキストの **topical Theme** となっている抽象化された要素の扱いであるが、もともとこれらの構成要素は挿入節を含んだ大きな名詞句である。英語訳の際には、その名詞句をそのままの大きさで **unmarked Theme** として取り入れるのではなく、ランク化した節に置き換え、節数を増やすことで対応が行われている。

英語訳で選択されている **unmarked Theme** は、(9-1) “some okonomiyaki”, (9-2) “but you”, (10) “the key”, (11) “that” である。翻訳の際、日本語テキストにおいて **topical Theme** の head となる「味」は、英語訳では **Rheme** において **process (taste)** や **participant (flavor)** として具現されている。一方で、この部分の英語訳における **Thematic progression** を見てみると、**unmarked Theme** の選択に **participant** 同士の一貫性はない。しかし、**Theme** の中に含まれている接続表現の **but**、定冠詞の **the**、前節全体に言及する指示詞の **that** によって、それ以前に述べられている節と導入される節の関係が示されるようになっていくことが分かる。この部分の英語訳テキストでは、文法的なリンクを用いて前の節にコメントを重ねることで、お父さんがどのような好み焼きを作ろうとしているのか、そのために重要な要素は何なのかを説明するようになっているのである。

(9-1) **Theme:** Some okonomiyaki + **Rheme:** its evaluation

→ (9-2) **Theme:** but you + **Rheme:** your negative evaluation on the okonomiyaki

→ (10) **Theme:** the key + **Rheme:** the way to resolve the problem

→ (11) **Theme:** that + **Rheme:** the reason why good ingredients are indispensable

情報をこのような流れに変えることで、英語訳テキストでは日本語テキストの(8)節「そのために大事ななのは、食材の質」という情報の発信源をはっきりとさせることができている。日本語テキストでは、(8)節の情報がお父さんな意見なのか、著者の意見なのか曖昧である。しかし、英語訳テキストでは(10)節において *creating* という語彙を用いることで(11)節で示される意見も *Akie and Schie's father* のものであることが伝わるようになっていく。これにより、(12)節の *unmarked Theme* である “He (father)” への接続が強固に維持されることになるのである。

この部分の英語訳テキストから分かることは、日本語テキストの *topical Theme* が挿入節を含む名詞句である場合、その構成素をそのままの形で英語訳の *unmarked Theme* として取り込むことは難しいということである。英語訳においては、日本語テキストにおいてランクシフトしている節をランキングさせ、後続する節への連結を考えた上でそれぞれの節の *unmarked Theme* を選択し、*Theme* 内の情報が過多にならないようにする必要があるのである。

実際、『ふたごや』の英語訳テキストの最後では、日本語テキストとは異なり、(12-2α) “T”, (13β) “T”, (13αα) “T” のように同じ *entity* が *unmarked Theme* として選択されている。この部分では『ふたごや』のお好み焼きに対する著者の評価が述べられているのだが、日本語で *topical Theme* として取り上げられている「キャベツ」や「ソース」といった要素は、英語訳では *Rheme* の位置にある β 節の *unmarked Theme* や *marked Theme* となる β 節の *Rheme* の位置で扱われている。

この部分の英語訳テキストで “T” が *unmarked Theme* として選択されている主な理由は、日本語テキストの最後の (10-3α2) 節の「頼んでしまった」が「(私は)」という省略テーマを有しているからであろう。この部分の日本語テキストは、(10-1β) 節から(10-2) 節までのキャベツやソースの描写が著者がお好み焼きをもう一

枚注文した理由であり、(10-3α2)「頼んでしまった」がその結果である。そのため、結果を表す部分である(10-3α2)節の topical Theme である「(私は)」が最も重要視される構成素となる。そこで、英語訳ではα節の unmarked Theme として“*I*”が選択され、その他の日本語の topical Theme となっている要素はβ節の unmarked Theme や marked Theme の一部として unmarked Theme “*I*”との関連で述べられるようになっているものと考えられる。

5. ま と め

本論文では、日本語の紀行文とその英語訳を分析データとして、日本語と英語の Theme 選択の相関関係について分析した。日本語の紀行文における Theme 選択の特徴の一つは、段落の最初において absolute Theme や circumstantial Theme によって一定の枠組みが設定された後は、その物理的コンテキスト内にある要素や、それに関連する要素は全て topical Theme として取り上げられる可能性を持っているということである。また、その配列も複雑に交差することがある。そのため、読者はすぐ前の節によって示される情報との関連というよりは、設定されている枠組みにあるさまざまな要素に視線を移し替えながら情報を拾い上げていく形でテキストを読み進めることになる。段落間の関連性も必ずしも明確ではなく、隣接する段落で全く新しいトピックが設定されている可能性もあるため、読者は中心となる要素との関連性を補いながら読み進めていく必要があるのである。

それに対し、英語訳の Theme の選択では、unmarked Theme となる要素をある程度固定させたり、トピックを移行させる際に前の節の Rheme で一度言及することによって旧情報化させた構成素を新たな節の unmarked Theme として用いたり、Marked Theme を用いる際にも旧情報となっている要素を用いるなど、節の前後関係を重視した選択が行われている。日本語テキストでは希薄な段落間の繋がりも、英語訳においては前の段落の最後の節と同じ unmarked Theme を用いるなどして強固な結束が保たれるような配慮がなされている。この点において、英語は日本語とは異なった Thematic progression の傾向を持っていると言える。

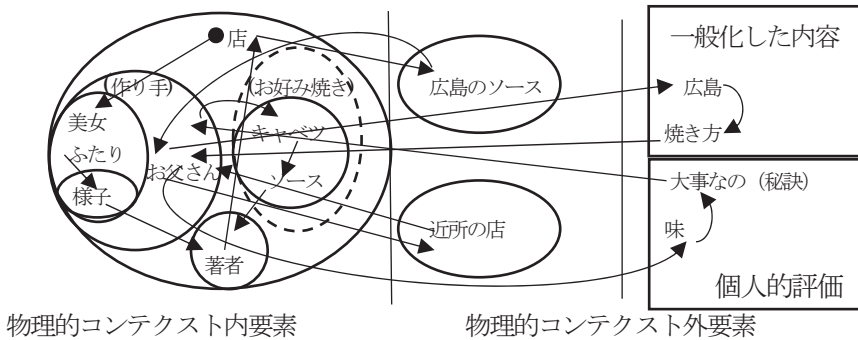


図4. 日本語テキストの Thematic Progression

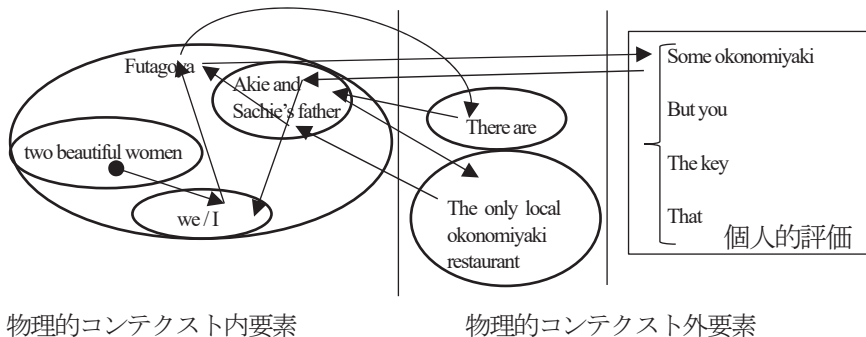


図5. 英語訳テキストの Thematic Progression

そのような中、英語訳における典型的な Theme の選択は、日本語の「は」で示される topical Theme を unmarked Theme として取り込むパターンとなっていた。その他の absolute Theme や circumstantial Theme で扱われている日本語の構成要素は、旧情報でない限りは英語訳では Rheme の要素として扱われる可能性が高い。また、subjective Theme に関しても、それが「彼女たちは笑うタイミングが同じ」のように topical Theme と part 関係にある要素である場合、Theme として選択される可能性は低くなる。

日本語テキストがさまざまな topical Theme を含む節複合となっている場合には、

最後の節の topical Theme が英語訳の unmarked Theme に選択される可能性が高くなる。それは、日本語の節構造においては、通常、最後の節に一番重要な内容が来るようになっているからだと考えられる。最後の節以外で「は」によって示されている topical Theme は、本研究のデータでは、英語訳の α 節の unmarked Theme にこそなっていないが、Rheme 内にある β 節の unmarked Theme となったり、その要素を含む β 節全体が marked Theme として取り上げられたりしている。そのため、これらの要素は単なる Rheme の構成要素ではなく、英語の複合節におけるさまざまなランクの出発点としての役割を担うほどには重要視されていると言える。

日本語の「は」で示される topical Theme が英語訳で unmarked Theme とならない典型的な場合は、topical Theme が挿入節を含んでいる場合であった。英語の場合、unmarked Theme にあまりにもたくさんの情報を詰め込むのは好ましくないため、日本語の挿入節を伴う名詞句をそのまま unmarked Theme として取り込むことはしない。むしろ、日本語の挿入節をランキングする節として復元し、後続する節への連結を重要視しながらそれらの節の unmarked Theme を選択する形がとられるのである。このような場合に、日本語テキストと英語訳テキストの Theme 選択のズレが最も大きくなると考えられる。

テキストにおける Theme 選択の差異は、日本語と英語の談話における思考経路の差異を表している。今後は紀行文のデータを増やすと同時に、他のジャンルの翻訳も分析対象に加え、より精密な両言語間の Theme 選択の関係について研究を進めてゆきたい。

参 考 文 献

- Butt, D., Fahey, R., Spinks, S. and Yallop, C. (1995). *Using Functional Grammar: An Explorer's Guide*. Sydney: Macquarie University.
- Eggins, S. (2004). *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* 2nd Edition. New York: Continuum.
- Fries, P.H. (1985). How Does a Story Mean What it Does? A Partial Answer. In J. D. Benson and W. S. Greaves (eds.), *Systemic Perspectives on Discourse, Volume*

1 Selected Theoretical Papers from the 9th International Systemic Workshop.
Norwood: Ablex. 295-321.

Fries, P.H. (1995). Patterns of Information in Initial Position in English. In P. Fries and M. Gregory (eds.), *Discourse in Society: Systemic Functional Perspectives* Vol.5. Norwood: Ablex. 47-66.

Halliday, M.A.K. Revised by Christian M.I.M. Mattiessen (2014). *Halliday's Introduction to Functional Grammar* 4th Edition. Oxon: Routledge.

庵功雄 (2001). 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』東京：スリーエーネットワーク

Maton, K. and Doran, Y.J. (2017a). Semantic Density: A Translation Device for Revealing Complexity of Knowledge Practices in Discourse, Part 1—Wording. *ONOMÁZEIN Número especial SFL*. 46-76.

Maton, K. and Doran, Y.J. (2017b). Condensation: A Translation Device for Revealing Complexity of Knowledge Practices in Discourse, Part 2—Clausing and Sequencing. *ONOMÁZEIN Número especial SFL*. 77-110.

Martin, J.R. and Rose, D. (2007). *Working with Discourse*. London: Continuum.

三原健一 (2008). 『構造から見る日本語文法』東京：開拓社

龍城正明 (2000). 「テーマ・レーマの解釈とスープラテーマ プラッグ言語学派から選択体系機能言語学へ」小泉保編『言語研究における機能主義—誌上討論会—』東京：くろしお出版 49-73.

龍城正明 (2004). 「Communicative Unit によるテーマ分析—The Kyoto Grammar の枠組みで」『同志社大学英語英文学研究』76 号, 1-20.

Teruya, Kazuhiro (2006). *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London: Continuum.

Thompson, G. (2004). *Introducing Functional Grammar* 2nd Edition. London: Arnold.

塚田浩恭 (2001). 『日英語の主題, 主語そして省略—体系機能文法的アプローチ—』東京：リーベル出版

文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 2)

—名詞句からの外置化—

杉 山 正 二

Abstract

In Sugiyama (2019), I proposed End-Weight Principle based on the new framework of Balance Theory and claimed that the rightward Focus movement such as Heavy NP Shift (HNPS) can be driven only if the focused NP has five points as its total weight in order to satisfy End-Weight Principle. In this paper, I would like to discuss another rightward focus movement, that is to say, extraposition from NP and suggest that the extraposed element should carry from four to five points as the total weight in order to satisfy End-Weight Principle. Through the discussion, I would like to make a proposal that the weight of subject should be revised to gain its extra focus weight. As a consequence of this revision, we could explain some important behaviors of extraposition from NP.

1. 序 論

杉山 (1999) で提唱したバランス理論は, 「旧から新」 (from old to new) という情報構造上の自然な流れを「軽から重」 (from light to heavy) という認知的な傾斜構造で捉え直した文法理論上, 初の試みであり, 焦点 (focus) が関与する英語の様々な構文を統一的に説明することを目指としている¹⁾。初期モデルから幾つかの修正を経て, 最新モデルである杉山 (2019) では, 主語 (subject), 目的語 (object),

¹⁾ 文の傾斜は, 次のように焦点を定義することによって, 焦点が文中で占める位置から自動的に決定される。

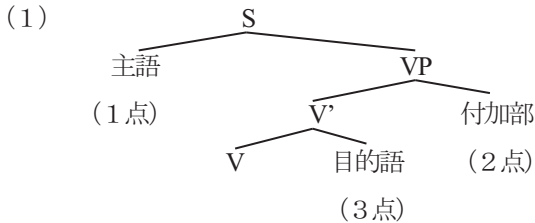
(i) 焦点: 文中で最も重要な情報を含む要素であると同時に, 最も重たい要素である。

(ii) 文の傾斜: 焦点が文のX端に位置すると, その文はX方向に傾斜する

(X=右 or 左)。

(杉山, 1999:26, 28)

付加部 (adjunct) の潜在的重量 (potential weight) をそれぞれの階層構造上の位置に従って (1) のように相対化することを提案した²⁾。



つまり、物理的な観点から階層構造上、下位を占める主要構成素 (major constituent) ほど重量が増すと仮定し、潜在的重量が重たい要素ほど表層構造 (surface structure) において焦点が付与されやすくなると仮定したわけである。次に、無標の焦点 (unmarked focus) には焦点度重量 (focus weight) として1点が加算され、有標の焦点 (marked focus) には2点が加算されると仮定する。そして、潜在的重量と焦点度重量を合算した総重量 (total weight) を用いて、従来の文末重心の原則 (End Weight Principle) を以下のように傾斜構造の観点から再定義した。

- (2) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4点 ≤ 焦点の総重量 (潜在的重量+焦点度重量) ≤ 5点

(杉山, 2019:40)

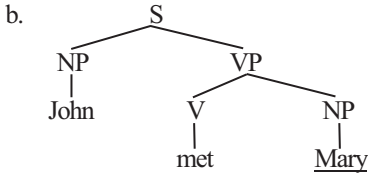
例えば、動詞の目的語に焦点が付与される無標の構造 (3a) は、(3b) のような内

²⁾ 潜在的重量とは、表層で焦点が付与される前の段階で主要構成素に内在的に付与されている重量を意味し、次のように決定される。

(i) 階層構造上の位置と潜在的重量の相対的關係：階層構造上、下位に生成される構成素ほどその潜在的重量が増す。
(杉山, 1999:45)

部構造と (3c) のような傾斜構造を持つ。以下、文中の焦点を下線と○で示すことにする。

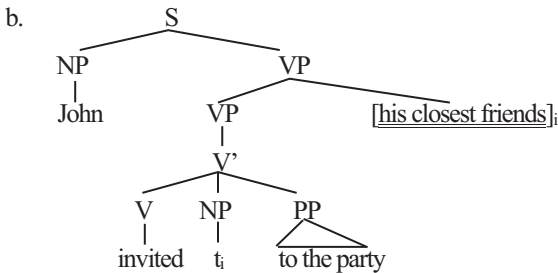
(3) a. John met Mary.



(総重量：潜在的重量3点+焦点度重量1点=4点)

一方, (4a) のように, 動詞の目的語が HNPS の適用を受けた場合は, 有標の焦点 (二重下線で示す) として焦点度重量2点が付与される。その結果, 焦点要素の総重量は5点となるが, この得点は HNPS の適用を受けた構造が文末重心の原則を最大値で満たす有標構造として認知されることを意味する³⁾。なお, 本稿で参照する原典には痕跡, 指標, 下線などの表示がないものがあることをお断りしておく。

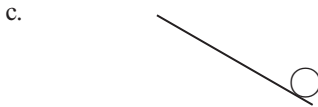
(4) a. John invited t_i to the party [his closest friends]_i. (Rochemont & Culicover, 1990:1)



³⁾ HNPS の焦点制約として (i) が仮定されている。

(i) HNPS の焦点制約: HNPS を受ける要素の総重量は5点でなければならない。

(杉山, 2019:30)



(総重量：潜在的重量3点＋焦点度重量2点＝5点)

杉山 (2019) では、右方焦点移動 (rightward focus movement) の代表的な事例として HNPS が自然に説明できることを主張したので、本稿ではもう一つの代表的な右方焦点移動である名詞句 (NP) からの外置化 (extraposition) をバランス理論の新しい枠組みを用いて再検討する。

2. 名詞句からの外置化

さて、同じ右方焦点移動に属し、着地点 (landing site) も文末という共通点を有するが、HNPS では NP 全体が移動し、外置化では NP の一部だけが移動するという適用領域の違いがある⁴⁾。例えば、(1a) では目的語 NP 内の関係節 (relative clause) が、そして (1b) では PP がそれぞれ後置されている。外置化の適用を誘発する焦点要素も HNPS の場合と同様に有標の焦点を担うと考えられるので、二重下線で示

⁴⁾ 動詞の目的語の場合、以下のように HNPS と外置化は共に可能である。

(i) a. I read t_i yesterday [a book by J. K. Rowling]_i.

b. I read [a book t_i] yesterday [by J. K. Rowling]_i.

しかし、操作の適用環境という面では HNPS と外置化の棲み分けは明確である。つまり、HNPS が容認されない環境で外置化が可能となる。(ii) は時制節の主語の場合を、そして (iii) は前置詞の目的語の場合をそれぞれ示している。

(ii) a. Five men with red ties appeared yesterday.

b. $*t_i$ appeared yesterday [five men with red ties]_i.

c. [Five men t_i] appeared yesterday [with red ties]_i.

(iii) a. $*John$ talked to t_i at the party [several people who had blond hair]_i.

b. John talked to [several people t_i] at the party [who had blond hair]_i.

(Rochemont, 1998:348)

逆に外置化が許されない環境では HNPS が選択される。(iva) は特定性条件 (Specificity Condition) の効果を示す事例であるが、(ivb) のように HNPS を駆動することによって特定性条件の違反が回避される。

(iv) a. $*John$ read [the book t_i] over the summer [by Chomsky]_i.

(Guéron, 1980:648)

b. John read t_i over the summer [the book by Chomsky]_i.

すことにする。

(1) a. I met [several people t_i] at the party [who we had known while we were in college]_i.

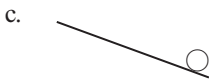
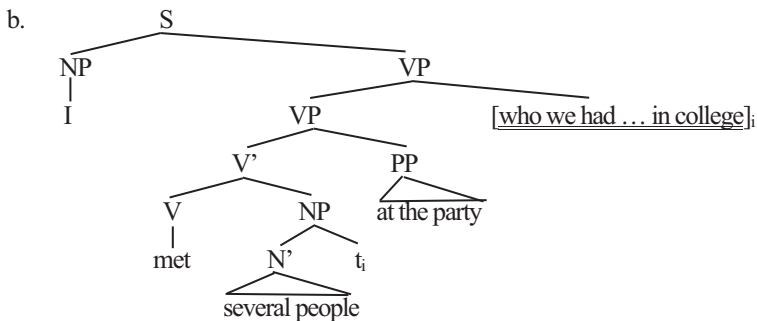
(Culicover, 1997:213)

b. I destroyed [a book t_i] yesterday [about Terry's travels]_i.

(Johnson, 1985:118)

まず関係節の外置化から考察する。関係節が生成される位置はN付加部と考えられているので、(2a)の内部構造は(2b)、傾斜構造は(2c)のようになる。

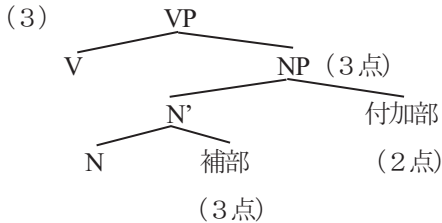
(2) a. I met [several people t_i] at the party [_{CP}who we had known while we were in college]_i.



(総重量：潜在的重量？点＋焦点度重量2点)

(2a)は文法的であるので、文末重心の原則に合致した構造であるという前提で話を進める。当該関係節の総重量は4点以上5点以下となるが、当該関係節の潜在的重量は何点であろうか。杉山(2019)において、最大範疇(maximal projection)が持つ潜在的重量がその主要部に浸透し、その結果、主要部の補部は最大範疇と同じ潜在的重量を保持すると仮定した。さらに、範疇を問わず、補部：付加部：指定部の比率を一律に3：2：1と設定した。ここでもそれらの仮定に従うと、NPが動詞の目的語の場合、NP全体の潜在的重量は3点となるので、以下に示すように、N補部

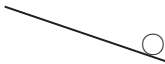
の潜在的重量は3点、一方、N 付加部の潜在的重量は2点と設定される。



すると、(2a) の関係節の潜在的重量は2点と設定される。この関係節が焦点となった場合、有標の焦点度重量2点が加算されるので、総重量は4点となり、文末重心の原則を満たすことが保証される。

(4) a. I met [several people t_i] at the party [who we ...]. (= 2a)

b.

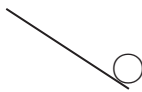


(総重量：潜在的重量2点+焦点度重量2点=4点)

ここでPPに移る前に、同格節 (appositive clause) の外置化を見てみよう。同格節は主要部 N の補部位置に生成されるので、(3) に示したように、その潜在的重量は3点と設定される。同格節が取り出される場合、有標の焦点度として2点が加算されるため、外置化要素の総重量は5点と計算される。したがって、同格節の外置化は文法的になると予測されるが、(5a) に示すようにその予測は正しい。

(5) a. I spread [a rumor t_i] yesterday [that Mary is in town]. (Johnson, 1985:106)

b.



(総重量：潜在的重量3点+焦点度重量2点=5点)

なお、同格節の総重量が5点になるということは、HNPS の場合と同点ということになる。つまり、同格節の外置化である (6a) と HNPS の (6b) の傾斜構造は実質上同じ形になることを意味するのであるが、主要部 N と構造上、同格の節が移動するのであるから、(6a) と (6b) の傾斜構造が一致するのは当然の結果と言えるだろう⁵⁾。

(6) a. I spread [a rumor t_i] yesterday [that Mary is in town].

b. I spread t_i yesterday [a rumor that Mary is in town].

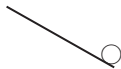
それでは次に NP 内からの PP の外置化を見てみよう。PP と言っても、補部と付加部に分かれるが、まず N 補部から議論する。例えば (7a) のように PP が N 補部の場合、(3) の設定に従うと、その潜在的重量は3点となる。この PP が焦点として指定された場合は、有標の焦点度重量として2点が加算されるので、総重量は5点となる。よって、(7c) の傾斜図が示すように、文末重心の原則を最大値で満たすことが導かれる。

⁵⁾ 関係節の外置である (i a) と HNPS の (i b) では、後者の傾斜の方が急になる。なぜなら、関係節の総重量は4点であるのに対して、HNPS を受ける重名詞句の総重量は5点となるからである。

(i) a. I met [several people t_i] at the party [who we had known while we were in college].

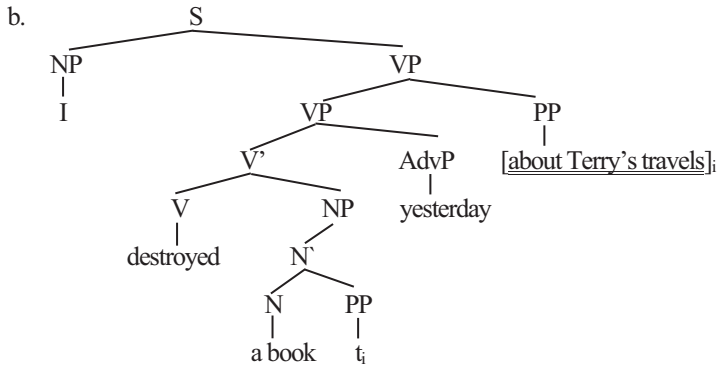
b. I met t_i at the party [several people who we had known in college].

c.



(総重量 : 潜在的重量3点+焦点度重量2点=5点)

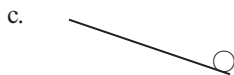
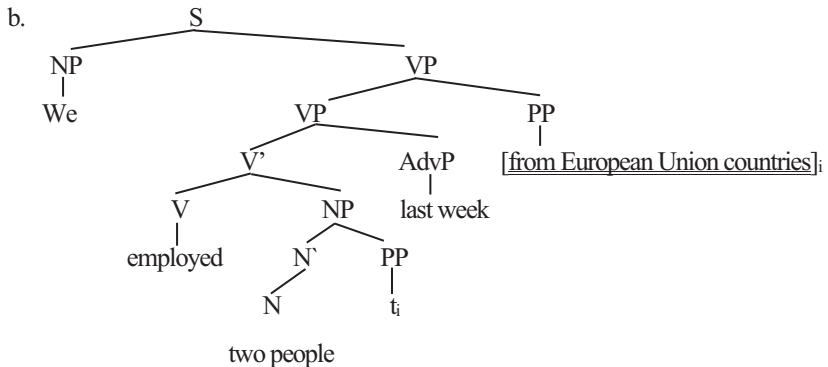
(7) a. I destroyed [a book t_i] yesterday [about Terry's travels]_i. (= 1b)



一方, (8a) のように PP が N 付加部の場合は, 当該 PP の潜在的重量は2点となる。したがって, その要素が焦点として指定されると, 焦点度重量として2点が加算されるので総重量は4点となる。

(8) a. We employed [two people t_i] last week [from European Union countries]_i.

(Aarts, 1997:189)



(総重量: 潜在的重量2点+焦点度重量2点=4点)

N 補部の潜在的重量より N 付加部の潜在的重量は 1 点軽く設定されていることから, (8a) における PP [from European Union countries] の総重量は, (7a) における PP [about Terry's travels] の総重量より 1 点軽くなる。その結果, (8c) の傾斜角度は (7c) より緩やかになるが, (8c) が文末重心の原則を遵守している傾斜構造である限り (8a) は正しく文法的と判断される。

以上の議論から本節では外置化の焦点制約として (9) を提案する。

- (9) 外置化の焦点制約 : NP から外置化される要素の総重量は 4 点以上 5 点以下でなければならない。

ここでの議論において, 外置化という操作が, バランスのとれた適格な右下降傾斜を形成する, つまり文末重心の原則を満たすための合法的な操作であることが明らかになった。次節では, 外置化適用に課せられた主な制約がバランス理論でどのように説明されるかを順次検証していく。

3. 検 証

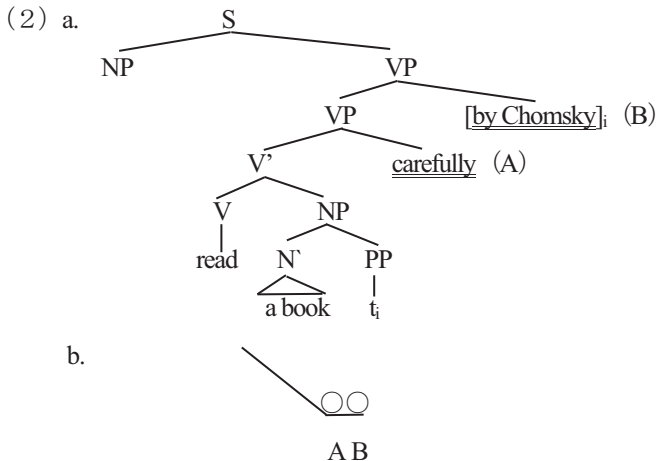
3.1 外置化に課せられた制約

第一の制約は, 外置化要素は時や場所を表す随意的な副詞句を越えて文末に移動できるのに対して, 様態 (manners) などの焦点化副詞 (focusing adverb) は越えることができないことである。以下の (1a) と (1b) の対比を見てみよう。

- (1) a. John read [a book t_i] yesterday [by Chomsky]_i.

- b. *John read [a book t_i] carefully [by Chomsky]_i. (Takami, 1990:197)

HNPS の議論の際にも主張したように, (1b) のような多重焦点 (multiple foci) を担う構造は, 過度の右傾斜が形成されることから直ちに排除される。(1b) の内部構造と傾斜構造は以下のように図示される。



(総重量 A : 潜在的重量 2 点 + 焦点度重量 2 点 = 4 点)

(総重量 B : 潜在的重量 2 点 + 焦点度重量 2 点 = 4 点) 合計 8 点

(2b) の傾斜図から明らかなように、文末を複数の焦点が占めると、文末重心の原則を満たす最大値の 5 点を大幅に超過してしまうため、この構造は破綻する。

第二に、主語 NP からの外置化は、他動詞 (intransitive verb) の目的語を越えることができない⁶⁾。

(3) a. *[A man t_i] hit Bill [with green eyes].

b. *[A book t_i] delighted Mary [by Charles]. (Guéron, 1980:637, 663)

ここで重要なことは、NP の潜在的重量は固定しているのではなく、文中の位置に

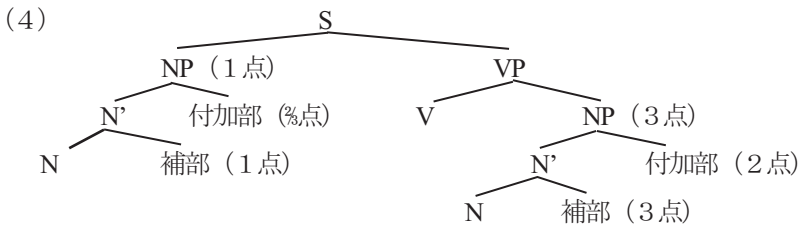
⁶⁾ ただし、目的語が焦点として解釈されないような文脈では主語からの外置化が可能となる。例えば、(i) のような目的語が代名詞の場合は、後で述べるように、主語内部からの右方移動が当該構造を右方向に傾斜させる力を十分に発揮するため、適格となる。

(i) a. [A man t_i] phoned me [who is one of my college classmates].

b. [A man t_i] called on me without warning [who claimed he had met me before].

(中島, 1995:18)

よって相対的に決定されることである。つまり、動詞の目的語位置なら潜在的重量は3点であるが、主語位置に生じた場合、NP 全体の潜在的重量は1点にまで軽くなる。その結果、自動的に主語 NP 内の N 補部は1点と設定される。NP の潜在的重量が1点の場合、補部：付加部：指定部の比率3：2：1に従うと、N 付加部は%点と計算される。主語 NP と目的語 NP の内部に基底生成される構成要素の潜在的重量の違いを以下の樹形図で確認しておこう。



この設定が正しいとすると、第二の制約も第一の制約と同じ路線で説明可能となる。なぜなら、通常文脈で解釈すると、無標の焦点は動詞の目的語が担うため、主語 NP からの外置化は、以下に示すように二重焦点に陥ってしまうからである⁷⁾。

⁷⁾ ただし、主語 NP からの外置化の可能性は主節動詞に左右される。例えば、(i a) のような「出現」を表す動詞は容認されるが、(i b) のように「消失」を表す動詞の場合、阻止される。

(i) a. [Many reviews t_i] appeared already [about this book].

b. [Many reviews t_i] disappeared already [about this book]. (Reinhart, 1991:364, 365)

これは「消失」は聞き手に驚きのメッセージを伝えるため、当該動詞そのものが焦点を担うことに原因があると考えられる。同様の理由によって、発話様態動詞 (manner of speaking verb) の場合も主語 NP からの外置化は阻止される。

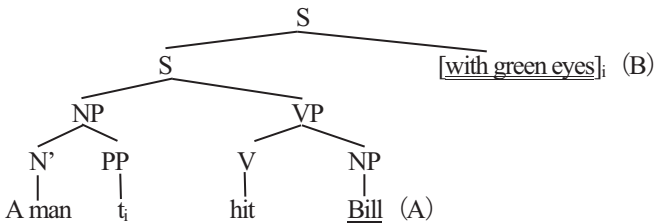
(ii) a. *[A child t_i] screamed [with green eyes].

(Johnson, 1985:103)

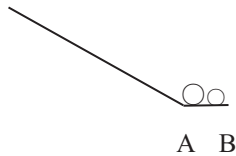
b. *[A woman t_i] whispered [from Italy].

(Koike, 2019:305)

(5) a.



b.



(総重量 (A) : 潜在的重量3点+焦点度重量1点=4点)

(総重量 (B) : 潜在的重量%点+焦点度重量2点=2%点) 合計6%点

主語 NP 内に生起する付加部 PP[with green eyes]の潜在的重量は%点と設定されるので、総重量は2%点となる。その結果、焦点 A と焦点 B を合算した総重量は6%点となり、文末重心の原則を満たす最大値の5点を超過するため、この構造は破綻することが導かれる。

ところが、ここで困った事態に直面する。実は、(5b)の傾斜図が示すように、主語 NP から外置化される PP の総重量 B が2%点だとすると、目的語の有無に関係なく主語 NP からの外置化は不可能と予測されるが、自動詞 (intransitive verb) の場合は以下のように文法的な事例が観察されているのである。

(6) a. [A man t_i] appeared [with green eyes]. (Guéron, 1980:639)b. [A review t_i] appeared [of Bill's book]. (Fiengo, 1980:140)c. [A review t_i] appeared [which should never have been written]. (Ibid.)d. [A man t_i] will arrive [who claims to be from Mars]. (Richards, 2016:195)

この事態を解決するためには、主語 NP に付与される有標の焦点度重量を再検討する必要性に迫られる。

そこで暫定的ではあるが、主語は文中において潜在的重量が最も軽い要素であるので、主語 NP からの取り出しは有標度が増し、焦点度重量として 4 点が加算されると仮定する⁸⁾。ここでの発想は、階層構造上の位置に応じて潜在的重量に相対的な差を設けたように、有標の焦点度重量の間にも相対的な差を設定し、取り出しにくい領域の要素ほど焦点度重量が増すという自然なものである。もしこの設定が正しいとすると、(7)において外置化される N 付加部の総重量は最終的に 4%点となり、文末重心の原則に対する違反を免れることが導かれる。

(7) a. [A man t_i] appeared [with green eyes]_i. (= 6a)

b.



(総重量: 潜在的重量%点 + 焦点度重量 4 点 = 4%点)

このように、外置化される N 付加部の総重量が 4 点以上 5 点未満であることが保証されると、(6c, d) のような関係節の外置化が許されることも同時に説明される。さらに、(6b) のような N 補部 PP の外置化が可能であることから、N 補部である同格節の外置化も可能であると予測されるが、実際可能である。

(8) a. [The proof that John was guilty] was presented.

b. [The proof t_i] was presented [that John was guilty]_i. (Lasnik & Saito, 1992:97)

(8b) がバランスのとれた構造として認可されるのは、主語 NP 内の同格節の潜在的重量が 1 点なので、有標の焦点度重量 4 点が加算されると、総重量は 5 点となり、文末重心の原則を満たす基準値を余裕で満たすからである。

⁸⁾ この 4 点という数字は (6) が文末重心の原則に従っているという前提で設定したものであり、主語 NP からの取り出しに通常の有標焦点度 (2 点) の倍の重量が負荷されるという設定に経験的な裏付けがあるわけではないことをお断りしておく。

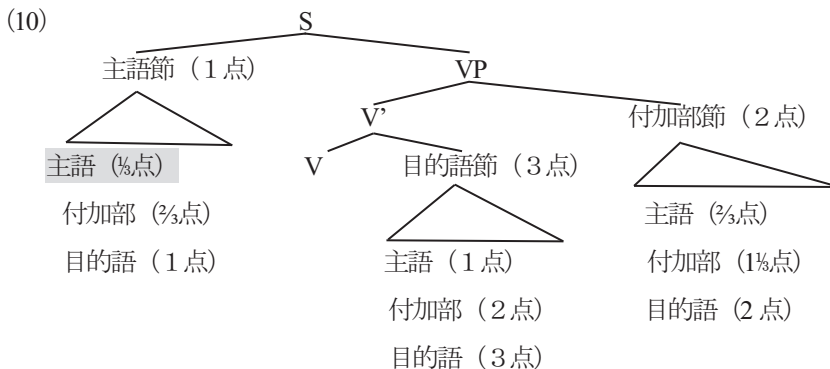
第三に、(9a) と (9b) の対比から明らかなように、HNPS と同様、外置化は上方制限 (upward boundedness) に従う。

(9) a. [That [the man t_i] arrived [who was from Boston]_i] amazed me.

b.*[[That [the man t_i] arrived] amazed me] [who was from Boston]_i.

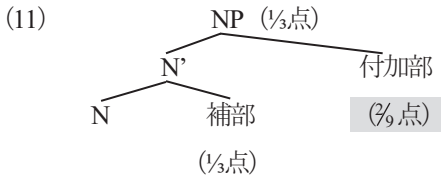
(Baltin, 1981:260,261)

(9a) における関係節は主語 NP の付加部なので、その総重量は (7a) における PP と同様 4%点となり、主語節内では合法的な右方移動として認可される。一方、(9b) において文末に外置化される関係節は、直感的に言っても、主節全体を右方向に傾けるには重量不足である。それでは、主語節内の主語 NP、および主語 NP 内に生じる付加部の潜在的重量は何点であろうか。杉山 (2019) では、以下に示すように、埋め込み文が生起する位置、つまり、目的語節、付加部節、主語節によって、その内部要素の潜在的重量が相対的に異なることを提案した。



この得点図から (9a) における主語節[that [the man [who was from Boston]] arrived]の主語 NP[the man [who was from Boston]]の潜在的重量は $\frac{1}{3}$ 点と設定される。では、その主語 NP 内に生成された関係節[who was from Boston]の潜在的重量は何点であろうか。補部 : 付加部 : 指定部 = 3 : 2 : 1 の共通比率で計算すると、主語 NP の内部

は以下のような得点配分となる。



すると、N 付加部の関係節[who was from Boston]は $\frac{2}{9}$ 点という極めて軽量の潜在的重量しか持たないことになる。また、[the man [who was from Boston]]は埋め込み文の主語 NP ではあるが、[That [the man [who was from Boston]] arrived] amazed me. という主節全体の主語 NP ではないため、この関係節の焦点度重量は通常の有標の焦点度重量として2点のみが加算されると仮定する⁹⁾。もしその仮定が正しいとすると、外置化の適用を受ける関係節の総重量は、以下に示すように $2\frac{2}{9}$ 点となるので、(9b) は文末重心の原則を満たすことができないと説明される¹⁰⁾。

⁹⁾ 焦点度重量が効力を発揮する領域を厳密に定義する必要があるが、本稿では暫定的に以下のように定めておく。

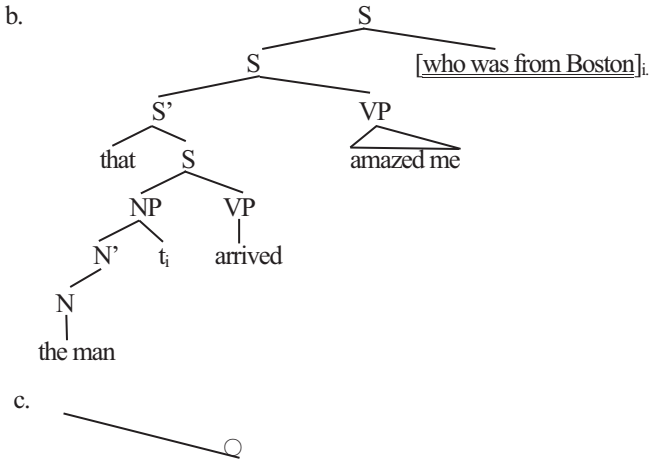
(i) 主語 NP から取り出される要素に対して有標の焦点度として4点が加算されるのは、主語 NP を支配する最小の S 内に限られる。

¹⁰⁾ なお、文主語の内部から HNPS が適用された場合は、主語 NP 内部からの取り出しではないため、有標の焦点度は2点止まりとなる。その結果、文末に移動した主語節内の目的語の総重量は3点となり、正しく排除される。

(i) *[That he bought t_i yesterday] is certain [a picture of Sue]_i. (Imai et al., 1995:234)

(総重量：潜在的重量1点+焦点度重量2点=3点)

- (12) a. *[[That [the man t_i] arrived] amazed me [who was from Boston]]. (= 9b)



(総重量：潜在的重量 2/3 点 + 焦点度重量 2 点 = 2 2/3 点)

3.2 前置詞の目的語 NP からの外置

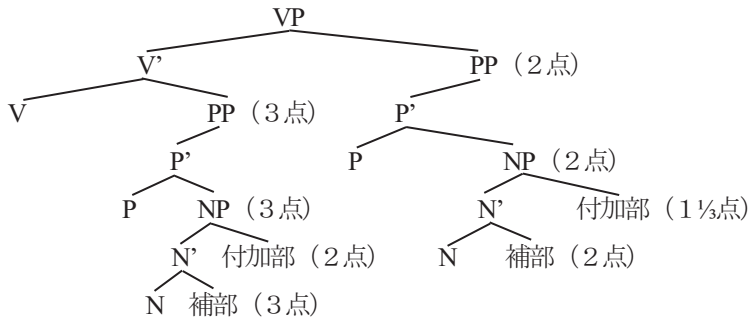
さて、前置詞の目的語 NP からの外置は、当該 PP が V 補部か付加部かで文法性が異なることが指摘されている。以下の対比を見てみよう。

- (13) a. Mary traveled [_{PP} to a town t_i] recently [that she used to visit in the summer]_i.

- b. *The mayor resigned his office [_{PP} after an election t_i] for some reason [that he won in a landslide]_i.
(Kroch & Joshi, 1987:134)

つまり、当該 PP が V 補部の場合に限り、前置詞の目的語 NP からの外置化が可能となるのである。ここで PP の場合も、PP の潜在的重量が主要部 P の補部 NP に浸透すると仮定すると、潜在的重量の得点配分は以下のようになる。

(14)

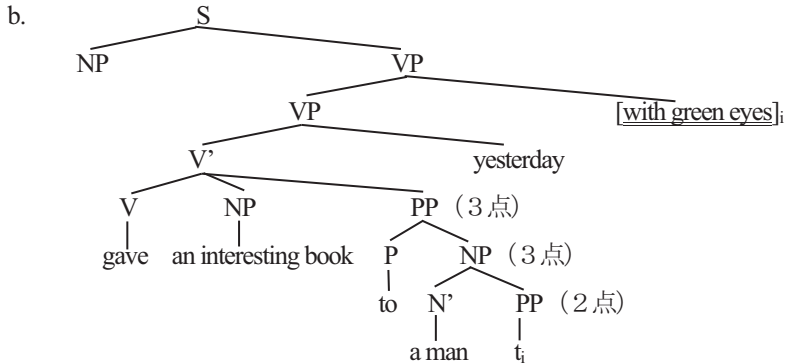


すると、当該 PP が V 補部の場合、主要部 P の補部 NP 内の関係節はその潜在的重量が2点と計算されるため、総重量は4点となり、(13a) は文末重心の原則を満たすことが保証される。一方、当該 PP が V 付加部の場合、主要部 P の補部 NP 内の関係節はその潜在的重量が1 1/3点と計算されるため、総重量は3 1/3点止まりとなる。その結果、文末重心の原則に対する違反として (13b) は破綻する。

以上の議論が正しければ、(15) のような与格構文からの外置化の文法性も説明することが可能となる。なぜなら、三項述語 (three-place predicate) である give の補部 PP の潜在的重量が3点、P の補部 NP の潜在的重量が3点、そして N 付加部[with green eyes]の潜在的重量が2点と設定されるため、付加部 PP の総重量は4点となり、文末重心の原則を満たすからである。

- (15) a. I gave an interesting book [to a man t_i] yesterday [with green eyes]_i.

(Takami, 1990:210)



(総重量：潜在的重量2点＋焦点度重量2点＝4点)

以上、前置詞の目的語 NP からの外置化の文法性が当該 PP が V 補部か付加部かで異なるという事実も予測可能であることを示した。

3.3 文主語の外置

さて、以下の (16b) のような形式主語 *it* と *that* 節との関係を主語節の外置化と見做し、NP からの外置化と同様に扱おうとすると問題が浮上する。

- (16) a. [That Louise resigned] surprised everyone.
 b. It surprised everyone [that Louise resigned]. (Haegeman & Guéron, 1999:120)
 c.



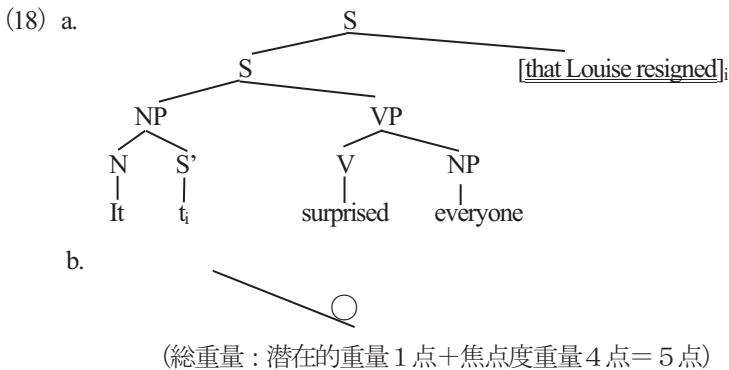
(総重量：潜在的重量1点＋焦点度重量2点＝3点)

なぜなら、主語の潜在的重量は1点と設定されているので、(16c) の傾斜図が示す

ように、主語節の外置化を保証することが困難となるからである。ここで主語節は主語 NP よりも潜在的重量が重たくなると設定すれば、(16b) を文末重心の原則に従わせることが可能となる。確かに単独の NP よりも節全体の重量が増すと考えるのは自然ではあるが、残念ながら、今のところその仮定を支持する経験的根拠がない。ここでは (16b) において、形式主語 *it* の存在がなければ、この外置化が成立しないことに注目したい。まず、*it* と *that* 節はペアを形成することから、基底段階では *that* 節は *it* の同格節の位置を占めると仮定する¹¹⁾。

(17) [It [that Louise resigned]] surprised everyone.

次に、この構造から *that* 節が文末に移動すると仮定すると、(16b) は以下のように、主語 NP からの外置化と捉えることが可能となる。



このプロセスが正しいとすると、(18b) の傾斜図が示すように、外置される節の潜在的重量は 1 点であるが、主語 NP からの取り出しということで有標の焦点度重量

¹¹⁾ 実際、動詞補文の場合、次例のように *it* と *that* 節が共起することがある。

(i) a. They doubt it [that you will go]. (Rosenbaum, 1967:34)

b. John knows it [that Mary left]. (Bošković, 1995:34)

の4点が加算されるため、**that** 主語節の総重量は文末重心の原則を満たす値となることが保証される。

4. 結 論

本稿では、HNPSと同様に、NPからの外置化も(1)の文末重心の原則に従う有標構文であることを主張した。

- (1) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4点 $\leq$ 焦点の総重量 (潜在的重量+焦点度重量) $\leq$ 5点

NPから外置される要素は、関係節、同格節、N補部のPP、N付加部のPP、そしてPPの目的語NP内の要素である。それらの外置要素が満たさなければならない焦点制約として本稿では(2)を提案した。

- (2) 外置化の焦点制約：NPから外置化される要素の総重量は4点以上5点以下でなければならない。

総重量に関しては、最大範疇が持つ潜在的重量がその主要部に浸透し、主要部の補部と潜在的重量を共有すること、そして補部：付加部：指定部の潜在的重量の比率は範疇間で共通しており、3：2：1の割合で分配されるという仮定を立て、議論を組み立てた。この比率の経験的妥当性に関しては今後さらに検討していく必要があるが、(2)の制約によってNPからの外置化の主要な特徴がバランス理論の枠組で自然に説明されることを主張した。

参考文献

- Aarts, B. (1997) *English Argumentation*. London : Macmillan.
- Baltin, M. (1981) "Strict bounding," in C. L. Baker and J. McCarthy (eds.) *The Logical Problem of Language Acquisition*. 257-295. Cambridge, MA : MIT Press.
- Bošković, Ž. (1995) "Case properties of clauses and the Greed Principle," *Studia Linguistica* 49, 32-53.
- Culicover, P. (1997) *Principles and Parameters*. Oxford : Oxford University Press.
- Fiengo, R. (1980) *Surface Structure*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Guéron, J. (1980) "On the syntax and semantics of PP extraposition," *Linguistic Inquiry* 11, 637-678.
- Haegeman, L. and J. Guéron (1999) *English Grammar*. Oxford : Blackwell.
- Imai, K. et al. (1995) *Essentials of Modern English Grammar*. Tokyo : Kenkyusha.
- Johnson, K. (1985) *A Case for Movement*. Doctoral dissertation, MIT.
- Koike, K. (2019) "Subextraction from NP and cyclic linearization," *English Linguistics* 35, 297-315.
- Kroch, A. and A. Joshi (1987) "Analyzing extraposition in a tree adjoining grammar," in G. Huck and A. E. Ojeda *Syntax and Semantics 20: Discontinuous Constituency*, 107-149. New York : Academic Press.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α* . Cambridge, MA : MIT Press.
- 中島平三 (1995) 「主語からの外置」高見健一 (編) 『日英語の右方移動構文』 17-35. 東京 : ひつじ書房
- Reinhart, T. (1991) "Non-quantificational LF," in A. Kasher (ed.) *The Chomskyan Turn*. 360-384. Oxford : Blackwell.
- Richards, N. (2016) *Contiguity Theory*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Rochemont, M. (1998) "Phonological focus and structural focus," in P. Culicover and L. McNally (eds.) *Syntax and Semantics 29, The Limits of Syntax* 337-363. New York : Academic Press.
- Rochemont, M. and P. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Rosenbaum, P. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 杉山正二 (1999) 「英語の焦点移動現象—バランス理論からの考察—」学位論文 安田女子大学
- 杉山正二 (2018) 「複合名詞句制約違反と連続的段階性」『英語英米文学論集』 27, 89-109.
- 杉山正二 (2019) 「文末重心の原則と右方焦点移動 (Part 1) —重名詞句移動—」『英語英米文学論集』 28, 21-41.
- Takami, K. (1990) "Remarks on extraposition from NP," *Linguistic Analysis* 20, 192-219.

執筆者紹介

青 木 順 子	(異文化コミュニケーション)	安田女子大学教授
青 木 克 仁	(認知意味論)	安田女子大学教授
三 宅 英 文	(英語学)	安田女子大学教授
杉 山 正 二	(英語学)	岡山理科大学教授

2019 年度修士論文題目

氏 名	題 目	指導教員
井上 彩	煉獄とはがれゆく自我 ——『ピンチャー・マーティン』に関する ラカン派精神分析的考察	田多良

学会活動報告

1 2019 年度講演会

7 月 11 日 (木), 7102 教室において講演会が行われた。講師は読売新聞
東京本社編集局 英字新聞部次長 樋口郁子先生。演題は「記者、ときど
き翻訳者」

2 2019 年度研究発表会

12 月 11 日 (水)

1 バラバラになるクリス

——『ピンチャー・マーティン』とラカン精神分析——

安田女子大学大学院 博士前期課程 井上 彩

(司会 田多良 俊樹)

2 言語取得：その先にある通訳翻訳への移行

安田女子大学 准教授

北原 アンドレア

(司会 John McLean)

投 稿 規 定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を2部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
 - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
 - ・用紙サイズはA5 とし、余白は上左右各 15 ミリ、下 10 ミリ、文字数と行数を、文字数 35 文字、行数を 29 行に設定する。
 - ・本文を日本語で書く場合のフォントはMS 明朝 (10 ポイント)、英語で書く場合は Times New Roman (10.5 ポイント) の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
 - ・題目 (12 ポイント・ボールド) は、2 行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル (12 ポイント) は、題目の 1 行下に入れ、センタリングする。
 - ・著者名 (12 ポイント・ボールド) は、題目の後に 1 行スペースを空けて記入し、センタリングする。
 - ・Abstract (10 ポイント) は、著者名の後に 1 行スペースを空けて書き始める。
 - ・Abstract は、日本語であれば 400 字以内、英語であれば 200 語以内とする。なお、abstract のタイトル部分のみ太字 (ボールド) とする。
 - ・本文は、abstract の後に 1 行スペースを空け、セクションの題目 (10.5 ポイント・ボールド・センタリング) を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は 1 から始めることとする。1.1.のようなセクションの下位項目の題目 (日本語 10 ポイント・ボールド、英語 10.5 ポイント・ボールド) は、左詰めにする。
 - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて 10 から 20 頁とする。
 - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
 - ・注 (9 ポイント) は脚注とする。
 - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用の PDF ファイルを一度送ることで最終とする。

附 則

この改正規定は、平成 5 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 9 年 6 月 19 日から施行する。
この改正規定は、平成 14 年 6 月 20 日から施行する。
この改正規定は、平成 22 年 5 月 13 日から施行する。
この改正規定は、平成 25 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 30 年 7 月 12 日から施行する。

安田女子大学英語英米文学会会則

第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。

第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
- 2 機関誌の発行
- 3 その他必要と認められる事業

第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。
会員

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
- 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
- 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。

準会員

- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
- 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。

第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。

第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。

- 1 会 長
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
- 2 運営委員
教 員 若干名、互選により選出する。
- 3 会計監査
(ア) 教 員 2名、互選により選出する。
(イ) 大学院生 1名、互選により選出する。

第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 大学院生1名、互選により選出する。

第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

施行細則

- 1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。
- 2 教員の委員は5名とする。
 - (ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。
 - (イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。
- 3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。
 - (ア) 会計へ直接納入
 - (イ) 現金書留での郵送
 - (ウ) 学会口座への振込

附 則

この改正規定は、平成 6 年 5 月 1 9 日から施行する。

この改正規定は、平成 8 年 6 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 3 年 7 月 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 5 年 5 月 1 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 3 0 年 4 月 1 日から施行する。

編集委員 三宅 英文
島 克也

英語英米文学論集 第二十九号
2020年2月20日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会
代表者 松岡 博 信
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 山菊印刷株式会社